



人に
聞けない!

青少年にかかわる人のための

『困りごと』ヒント集



まずは、目次のページを開いてみて下さい。

あなたの『困りごと』は、みんなの『困りごと』
かもしれません。



◆◆◆ この冊子の使い方 ◆◆◆

日頃の活動や業務で困ったことに直面したら、この冊子の目次をながめ、同じような困りごとを見つけたらそのページを読んでみてください。パーフェクトな答えにはなっていないかもしれませんが、解決の糸口となるヒントが得られるかもしれません。そして先輩スタッフなどに相談することも大切です。

また、時間がある時には、左ページの下段にある「囲み」を読んでみてください。これは実際に相談を受けた話ではありませんが、多くの方の協力をもとに、現場で起こりがちな「あるある」を集めてみたものです。それを読みながら、「こういうケースではこうしてみよう」といった自分なりの想定やシミュレーションをしてみることで、実際に遭遇した際の冷静な対応につながるかもしれません。

また、スタッフのミーティングや職場の研修などでケーススタディの題材として事例を使っていただくことや、みなさんの現場（職場）でスタッフマニュアルを作る際の参考にさせていただくようなことも想定して、作成しました。それぞれの使い方、ご活用いただければ幸いです。

この冊子は、これから子ども・若者と関わろうとしている方や、比較的経験の少ない方をおもな対象として作成しました。まずはこの冊子を入口と考え、そこからさらに深い学びにつなげていってください。そのための参考文献なども紹介してあります。

なお、この冊子のデータは、webサイトにも公開しますので、団体や職場で共有する際に、ご利用ください。

目 次

はじめに

専門委員の紹介

イベント

01	意見を求めても発言してくれません。・・・・・・・・・・	3
02	公共交通機関でのマナーやルールをどう伝えたら良いですか。・・・・・・	5
03	バスの出発前に注意すること、移動中に楽しめることはありますか。・・・・	7
04	歩いていると子どもの列が間延びしてしまいます。・・・・・・	9
05	イベント中にすぐに写真を撮りたがります。・・・・・・	11
06	見ていだけで活動に参加しない子どもがいます。・・・・・・	13
07	男女がすぐに別れて、なかなか交わりません。・・・・・・	15
08	人の前に立つ時どんなことに注意したら良いのでしょうか。・・・・・・	17
09	グループ単位の活動で、進行に大きな差が出てしまいます。・・・・・・	19
10	大人数へのアイスブレイキングが大変でした。・・・・・・	21
11	子どもが活動中にケガをしてしまいました。・・・・・・	23

キャンプ

12	キャンプの下見は何回するもののでしょうか。・・・・・・	25
13	キャンプの参加者に持ち物のイメージが伝わりません。・・・・・・	27
14	スタッフの目印はどのようなものがありますか。・・・・・・	29
15	活動に必要な道具のレンタルができる場所はありませんか。・・・・・・	31
16	キャンプの安全対策はどこまですれば良いのですか。・・・・・・	33
17	野外炊事で気をつけることはありますか。・・・・・・	35
18	早起きしすぎる子どもがいます。・・・・・・	37
19	ホームシックになる子どもへの対応はどうすれば良いですか。・・・・・・	39

はじめに

社会環境が刻々と変化する中で、その影響が青少年に現れてきています。例えば、コミュニケーション能力の低下や自己肯定感の低さ、またネット依存による弊害が生じています。

そのような中で、家庭や学校だけでなく、地域活動での多様な体験は重要になってきています。そういう意味で青少年支援・指導者の方々は子どもたちにとって貴重な存在です。

神奈川県青少年指導者養成協議会では、そのような方々のお役に立ちたいと考え、これまで、「アイスブレイキング」「群れ遊び」「グループワーク」などのアクティビティを冊子やDVDにまとめて紹介してきました。

今年度は少し趣を変え、青少年のさまざまな活動において、対応に困った場面をピックアップし、それに関する「ヒント」を提示する冊子を作成しました。掲載されている38の事例は神奈川県内で青少年の活動に携わっている方々にご協力いただき集めたものを、専門部会で精選したものです。広く汎用性のある事例にしようと事例の選定に多くの時間を費やしました。また、青少年活動を4つの分野「イベント」「キャンプ」「子ども施設」「スタッフ・ボランティア」に分けるのに際して、最善のカテゴリー分けはどうすれば良いのか、何度も話し合いました。

この冊子は、単なるQ&A集ではありません。対応の仕方は千差万別、答えは一つではありませんから、この冊子を読んでいただくことで、複眼的に「困りごと」への対応ができるような内容を目指しました。そして、青少年と活動する中で、役に立つ「心構えの一助」という性格の冊子ができあがりました。

一人で考え、この方法しかないと考えて進めるよりも、周りの人と協力しながら、青少年の背景や関係性等の情報を共有して対応することにより、青少年支援・指導者の方々の活動がより楽しいものとなることを願っています。

平成29年度神奈川県青少年指導者養成協議会専門部会委員一同

子ども施設

20	乳児専用スペースに入って遊ぶ小中学生がいます。．．．．．	41
21	仕事で忙しい時、子どもから「一緒に遊ぼう」と言われてしまいます。．．．	43
22	刃物を使わせることに不安があります。．．．．．	45
23	気軽にできない遊びをしたいという声に、どう対応したら良いでしょう。．．	47
24	下ネタを連呼する子どもがいます。．．．．．	49
25	子ども同士のケンカにどう対応すれば良いのでしょうか。．．．．．	51
26	子どもたちから、ケンカの解決を自分たちでしたいといわれました。．．．	53
27	自分の思いどおりにいかないと、人やモノに当たったり暴れたりします。．．	55
28	初対面の子どもから、「おまえ」「ババア」などと呼ばれました。．．．．．	57
29	特定のスタッフをターゲットに、乱暴な言動をくり返す子どもがいます。．．	59
コラム：子どもの危険を判断する基準「リスク」と「ハザード」．．．．．		61
コラム：常にフラットな目線で ．．．．．		62

スタッフ・ボランティア

30	子どもへの姿勢が一貫せず考え方の違いが出てしまいます。．．．．．	63
31	ボランティアとして関わってくれる人が集まりません。．．．．．	65
32	子どもに対しうまく物事を伝えることができません。．．．．．	67
33	他機関・地域と連携・協力する必要はありますか。．．．．．	69
34	地域へのアプローチの仕方がわかりません。．．．．．	71
35	会議等の話し合いの場で意見が出てきません。．．．．．	73
36	話し合いの際の司会進行のやり方がわかりません。．．．．．	75
37	話し合いの場で自分の意見をうまく伝えることができません。．．．．．	77
38	相手に主体性を持ってもらうためにはどう関われば良いのでしょうか。．．．	79
コラム：ふりかえりは、「活動の良し悪し」ではありません。．．．．．		81
コラム：青少年支援・指導者に求められる参加者等に対する配慮とは ．．．		82

参考文献

これまでの発行物紹介

この本の制作に関わった人たち

専門委員の紹介 (神奈川県青少年指導者養成協議会専門委員)

いしかわ としゆき

石川 聡之 (あぞさん)

小田原市青少年推進員 (青少年指導員)

小田原市在住の会社員。小田原市子ども会連絡協議会事務局次長。
小田原市の指導者研修事業である「おだわら自然楽校 (OTTS)」
のメンバーとして、キャンプや日帰り事業のスタッフで活躍。
また、プロジェクトWETやグローイングアップワイルドのファシリテーターとして、
自ら研修の講師もつとめる。



いしはら りょう

石原 遼 (いえもん)

川崎市子ども夢パーク スタッフ

神奈川県藤沢市出身。関東学院大学人間環境学部で初等教育を専攻
し卒業。現在は、川崎市子ども夢パークにおけるプレーパーク (冒
険遊び場) で、日々、乳幼児から中高生の子ともたちと関わる。また、生まれ育った
湘南地域で、中高生が社会参加をしていく機会をつくる「湘南まちいくプロジェクト」
の代表を務め、シティズンシップ教育の実践にも携わる。

おおやま ひろし

大山 宏 (おーちゃん)

東京都板橋区立大原生涯学習センター 社会教育指導員

東京大学大学院博士課程在籍。専門は社会教育学、生涯学習論。
学生時代のボランティア活動をきっかけに若者の居場所に関心を
持ち、全国の子ども・若者向け施設を訪問。青少年の居場所づくり全国フォーラム実
行委員長などを歴任する一方で、社会教育指導員をつとめる板橋区の施設でも、中高
生・若者の居場所づくり事業を行っている。日本社会教育学会プロジェクト研究メン
バー。子ども・若者支援専門職養成研究所メンバー。





たかはし ひろし
高橋 博（ひろし）

神奈川県立愛川ふれあいの村 副所長兼事業主任

滋賀県出身。学生時代より、野外活動のボランティアとして子どものキャンプなどに関わる。2004年に日本環境教育フォーラム主催の指導者養成講座を受講。翌年、愛知県で開催された「愛・地球博」でインタープリターをつとめる。千葉自然学校職員を経て、NPO法人国際自然大学校に入職。埼玉県内の施設の管理運営や福岡校の立ち上げに関わり、2014年より現職。

表紙・挿絵デザイン

こもり まりこ
古森 真理子（まりっぺ）

川崎市子ども夢パーク スタッフ



事務局



かわて たかお
川手 隆生（プーさん）



たくら ひろあき
田倉 弘明（シンプソン）



きくち りつこ
菊地 利津子（ももっち）



しみず いさお
清水 功（し〜ちゃん）



よしだ ただとし
吉田 忠利（よっすいー）

01 意見を求めても発言してくれません。



子ども会キャンプの企画ミーティングで、小学生と一緒に打合せをしても、なかなかうちとけて話をしてくれません。このような時は、どうしたら良いですか。
(ジュニア・リーダー)

あぞさんのヒント



誰かに参加させられている場合、いやいや参加している感があるので、単に意見を求めても乗ってきてはくれません。自分の意思で参加している場合であっても、意見が思いつかない時や、話題についていけない、興味が無い場合も乗ってきてはくれません。

STEP1 参加意識

まずは参加意識を高める必要があります。会を始める時に、参加への感謝の気持ちを伝えと共に、会の目的やタイムスケジュール、ルールを確認しておきましょう。

STEP2 雰囲気づくり

次にアイスブレイキング (P.16※1参照) を行って、場の雰囲気を和ませましょう。お互いのことがわかるように自分が興味を持っている話題を盛り込んだ自己紹介や、子どもの場合は好きな果物別に集まるとか、血液型で集まるなど、お題を変えて数回やってみると、共通意識が生まれて話し合いに参加しやすい場になります。

STEP3 相手を知る

ファシリテーター (P.18※参照) は参加者のプロフィールをできるだけ把握しておきましょう。そのためにもアイスブレイキングをうまく使いましょう。プロフィールを把握しておけば、話し合いの中でその人の得意分野にふれる話題が出た時は、すかさずその人に簡単な質問形式で話題を振ることができます。得意分野については話す内容をたくさん持っていますから、そこから参加意識を高めていきましょう。出された意見がそぐわない物であってもいきなり否定せず、まず受け止めて一定の理解を示しましょう。自分の意見が受け止められたという事実が参加意識の向上につながります。

【アイスブレイキングの一例】

ゲーム名	内 容
実は...	「実は」ではじまる自己紹介をしてもらいます。
今日の漢字	今日の自分を漢字 1 文字で表現してもらいます。
4 つのお題	紙を配り、それを 4 等分に折ってもらいます。(折り方は自由) 次にお題を 4 つ出して、自分についてお題に沿って書いてもらい一人ずつ発表します。どんな折り方をしたかを比べて、その違いを話題にできます。 <お題の例> ①所属・氏名 ②24 時間以内にあった「新しい」こと ③いま一番はまっていること ④これからの夢

02 公共交通機関でのマナーやルールをどう伝えたら良いですか。



公共交通機関を使って日帰りで遠出をした時に、子どもたちにルールやマナーを徹底できず、周りの人たちに迷惑をかけてしまいました。

(引率の保護者)

ひろしのヒント



個人で利用する時と違って、キャンプなど大人数で電車、バスなどの公共交通機関で移動する際は、注意が必要です。一番のポイントは、『自分たちの団体だけが使っているわけではない』ということ子どもたちに伝えることです。乗車前に、子どもたちとお約束すると良いでしょう。

お約束の例 「これから電車（バス）に乘りますが、3つの約束を守りましょう」

- ①「1つ目は、降りる人が先だよ」
- ②「2つ目は、バラバラにならずにグループで固まるよ」
- ③「3つ目は、大きな声で騒がないよ」

留意点等

- ・他にも「つり革で遊ばない」「スタッフから離れない」など状況に応じて、内容を変えると良いと思います。また「なぜ、騒いではいけないと思う？」などその約束の理由を聞くと、さらに子どもたちの理解が深まります。もし答えられなくても、「周りの人に迷惑になるから、静かにするよ」など教えてあげれば良いと思います。
- ・約束は3つぐらいに留めておきましょう。あまり多くなると、覚えられなくなります。
- ・リュックサックなどを背負っている時は、荷物を下ろす言葉かけや冬場などは上着を脱いで温度調整をする言葉かけも必要になります。子どもは面倒くさかって、荷物をおろさなかったり、上着を脱がなかったりしますが、結果、荷物を持っていることで他の人の迷惑につながったり、荷物が邪魔で不自然な座り方になり、車内の温度で気分が悪くなる場合もあります。
- ・車内の過ごし方として、グループに1つ小さなホワイトボードなどがあると、絵を描いたり、クイズをしたりして楽しむことができます。

公共交通機関を利用する時は、子どもたちが社会性を学ぶ良い機会だと捉えて関わると利用する意味がさらに深まると思います。

コラム**公共の場の安全を確保するために**

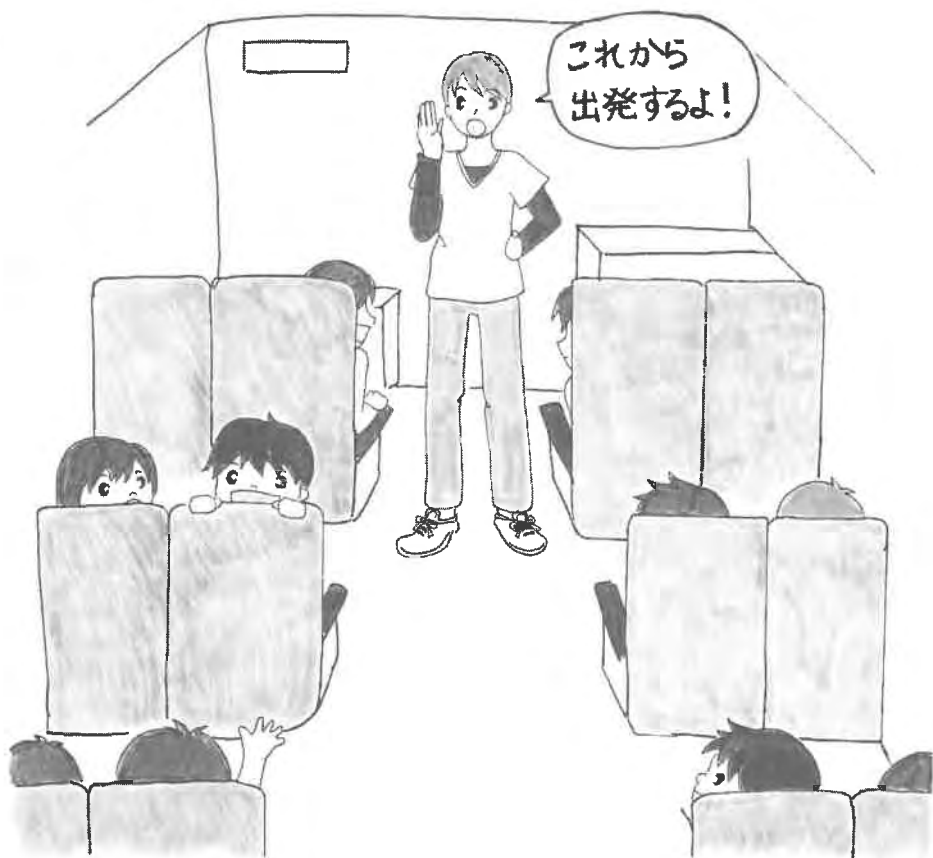
し〜ちゃん

駅のホームやバス停などで、集団で行動している団体やグループを見かけた時に、そのマナーの悪さから危険を感じたことはありませんか。例えば駅のホームやバス停等で、電車やバスに乗ることを楽しみにしていて列からはみ出したり、友達と一緒にいることでハイテンションになって車道に出てしまったり、思わぬ事故になるのではないかとヒヤヒヤすることがあります。

そのような状況になる前に、まずは子どもたちの状況を把握し、落ち着かせましょう。そしてホームでは階段付近ではなく、比較的広い場所にまとまり、バス停では少し離れた安全な場所に待機して、電車やバスが来たら、そのまま乗れるような子どもたちの環境づくりを考えることも大切です。またホームを歩く時は、他の乗客が乗降し終わった後に、行動することも配慮したいところです。

いろいろと方策はあると思いますが、言葉をかけることの他に、子どもたちを取り巻くその場の環境を考えて事故を未然に防ぎ、安全に行動したいものです。

03 バスの出発前に注意すること、移動中に楽しめることはありますか。



先日バスで、初めて日帰り遠足に出かけたのですが、出発前に話をするのを忘れたり、移動中に楽しめることを考えていなかったもので、間が持ちませんでした。

(子ども会引率者)

ひろしのヒント



貸切バスを利用して引率した経験がないと、何を出発前に話したら良いか、移動中に楽しめることは何かなど、なかなか思いつかないと思います。バスガイドがいない場合には、引率者が話をしたり、バスの中でのレクリエーション（バスレク）を担当したりする可能性もあります。前もって話をすることをまとめたり、楽しめるゲーム等を考えたり、用意しておくことで良いでしょう。

出発前の話 ※話が終わった後に、運転手さんへの挨拶も忘れずに！

- ①乗車中は、シートベルトを必ずしましょう。
- ②座席シートの上に立ったり、後ろ向きに座ったりするのはやめましょう。
- ③窓は開けないでください。
- ④車酔いなどで気分が悪くなったら早めに伝えてください。 など

移動中に楽しめること

学校行事のように、慣れ親しんだ仲間同士での移動なら、既に関係ができていますので、目的地までは、近くの人と話をするなど楽しむことができることでしょう。ただ募集型のキャンプ等の場合は、初めて会うメンバーでバスに乗り込むことが多いと思います。まだまだ緊張した状態では、近くに人が座っていてもなかなか会話も生まれづらいものです。

まずは緊張をほぐすことが大事です。全体でじゃんけんや指遊びなどの簡単なゲームをして、楽しい雰囲気を作り出していきます。ポイントは、声を出させることと笑顔を引き出すことですが、全員シートベルトの着用が義務付けられているので、立ち上がったたり、離席したりする遊びは、御法度です。また指導者も指示をする時は、座りながら行うのが基本です。

全員が参加できるクイズなども良いですね。目的地に関するクイズにすれば、キャンプの導入にもつながります。キャンプのスタッフに関するクイズにすれば、スタッフとのアイスブレイクにもつながります。帰りのバスでは、キャンプの思い出話やふりかえりをするのも良いでしょう。ただし、前日に睡眠をとっていなかったり、疲れていたりすると車に酔う可能性がありますので、体調を確認しながら行う必要があります。また疲れから寝てしまう場合もあります。無理をせず「寝る」こともバスを楽しむ一つと捉え対応したいものです。

【バスレクの一例】

ゲーム名	内 容
かぶつちゃ やーよ	お題を出して、そのお題にグループごとで答える。他のグループと被らない答えを出す。例えば、「赤いものと言えば」など。
スタッフクイズ	スタッフに関するクイズを出して、どのスタッフが該当するか答えるゲーム。子どもとスタッフとのアイスブレイクにもなる。
連想ゲーム (山手線ゲーム)	テーマを決め、拍手を2回して答えていくゲーム。「好きなアニメ」「好きな食べ物」など、自己紹介も兼ねたテーマで行うのも意外と盛り上がる。

04 歩いていると子どもの列が間延びして
しまいます。



遠足で歩いていると、子ども達の列が間延びをし、とても長い隊列になってしまいます。どうしたら良いでしょうか。

(学童保育指導員)

ひろしのヒント



子どもによって歩くスピードが違うため、グループ（班）ごとに移動するとどうしても列が間延びしてしまうのは、ある意味仕方ないことだと思います。この間延びをどこまで許容できるかがポイントだと思います。またグループにつくスタッフの人数によっても変わってくると思います。

引率が一人の場合

スタッフが前を歩き、歩くスピードを遅い子に合わせるなどコントロールしながら、距離が開かないようにします。またある程度歩いたら、歩く順番を変えるのも一考ですね。歩くのが遅い子を前にしてみるなどの工夫も考えられます。他には、しりとりやクイズなどのやりとりをグループ全員で行い移動していく方法もあります。

引率が複数の場合

スタッフが複数いる場合は、移動が遅い子は別のスタッフにお願いしてみるのも手だと思います。目的が「グループでまとまって歩く」などでない時は有効です。とはいえ移動途中の道に車が通る場合は、とにかく安全第一なので、歩くスピードをコントロールするとともに、スタッフの配置を手厚くする必要があります。

コラム

歩く時のモチベーションの保ち方

し〜ちゃん

「歩く」と言っても、人それぞれ歩幅やスピードは異なります。また、歩く時の意欲、やる気、つまりモチベーションによっても、それが乱れたりもします。特に山登りや長い距離を歩く時は、疲れてくるとモチベーションが下がり、歩くことを避けたい気持ちになります。

そうなる前に、まず引率者が全員の体力やモチベーションを事前に把握し、適宜言葉をかけたり、休憩をしたりすることで、モチベーションを下げないようにすることが大切です。よく子どもたちに、この先には「ゆっくり休めるソファがあるよ!」「自動販売機があるよ!」等と本当にはないことを伝え、冗談でモチベーションを高めたりもしますが、まずはその先の見通しを持たせることが大切だと思います。

山登りだと「何合目」とか、「休憩所」とか、「見晴らしの良い場所」とか、必ず目安になるものがあるので、それらを休憩の目安としても良いと思います。そして全体でどのぐらいの距離があって、次の休憩がどのぐらいしたらあるのかを把握します。「えっ、まだそんなにあるの?」と思わせずに、小さな目標（スモールステップ）を設定し、「もう少し歩いたら休憩できる」と、自分自身でモチベーションをあげさせることも大切だと思います。

山登りや長い距離を歩く場合は、誰もが心身共に追い込まれていきますので、そのような時にスモールステップがあると、意外と乗り越えることができると思います。

05 イベント中にすぐに写真を撮りたがります。



この施設に来る中学生はよくスマートフォンで写真を撮っています。私もついノリで「イエーイ！」なんて一緒に写っていますが…。

このあたりの対応の仕方を皆さんはどうしているのでしょうか。教えてください。

(施設ボランティア)

あぞさんのヒント



最近はデジカメも安くなり、またカメラ付携帯電話やスマートフォンを持つ子どもも多くなったので、このような子どもが増えていますね。

まずは、個人情報の点から写真を避ける人がいることや、写真に写ることを好まない人がいることを理解させましょう。そしてカメラは本人の責任で管理し、紛失・破損に関して指導者は関知しない、写真を撮る時は指導者に許可をもらうなどルールを決めておきましょう。それが守られれば写真を撮ることに制限を設ける必要はないと思います。もちろん指導者側でも写真を撮る時間を作ってあげることが必要です。また、指導者側で記録用の写真を撮るような活動では、写真係（記録係）に任命して積極的にカメラを預けてしまうのも一つの方法です。

次に考えなければならないのは、撮影した写真の取り扱いです。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）への投稿など、広く他人の目に触れるような場合には注意が必要です。撮影した子どもやその保護者に対し、公共の場への投稿などはしないように説明しましょう。もし、投稿する場合は、写っている人の許可が必要であることやトラブルに対して責任を取らなければならないことを説明しましょう。キャンプなどでは、カメラ等の紛失・破損などのトラブルを避けるため、持ってこないようにお知らせしているところもあります。活動内容が充実していれば、楽しく夢中になり、写真を撮るのも忘れてしまうことでしょう。

【写真利用に関する6か条】

- 第1条 撮る時は許可をもらう。
- 第2条 写真の背景に「写ってはいけないもの」が写っていないか注意する。
- 第3条 許可なくネットなどに載せない。
- 第4条 写真を他人に勝手に配らない。
- 第5条 不要な写真は削除して手元に残さない。
- 第6条 自分が撮影した写真の責任は自分にあることを忘れない。

コラム

写真でトラブル！

あぞさん

仲良しの子ども同士で記念撮影をしました。とても良く撮れていたのですが、被写体の子どもや保護者に許可を得て、SNSにアップしました。後日まったく知らない人から抗議がきて、削除や謝罪などの対応に追われることになりました。実はアップした写真の背景に、仕事上、顔を出してはいけない人が写りこんでいたのです。

このように被写体以外の部分にトラブルの原因が潜んでいることがありますので、写真をSNSなどにアップする場合は細心の注意が必要です。

06 見ているだけで活動に参加しない子ども
がいます。



この間も周りになじめていない子がいたのでちょっと話しかけてみたら、「どうして、大人が喜ぶような反応をみんなでしているんだろう。僕にはできない…」と。「仲間に入ってみれば」と促しましたが、こんな時は、どうしていますか。私は個人的にはそういう子を無理やり集団に入れ込むのは違うと思うのですが…。

(イベントスタッフ)

あぞさんのヒント



活動で一人外れて参加しない子どもがいると指導者やスタッフはやりにくいと感じると思います。しかし無理に参加させても、活動の輪が乱れてしまったり、本人がつまらなくなったり悪い方向に向かってしまったりすることがあります。

まず、活動を主導している指導者とは別の指導者やスタッフに事情を聞いてもらいます。ゲームがうまくできないならそばにいて一緒にやってあげるなど、何か困りごとがあれば対応を取ります。特に何もないのであれば、無理強いしないで「いつでも入ってきて良いからね」と言葉をかけて見てみましょう。手の空いている指導者がいれば、一緒に寄り添うというのも良いでしょう。見ていられるなら興味は持っています。

しかし、見ていても自分が参加したい気持ちがいま一つ盛り上がらない状態はあります。チームビルディング※などでは、グループ形成の過程で他の子どもたちから参加を促す声があり、自分が必要とされていると感じることで加わることもあります。ゲームなどでは自分が面白そうだと思うと口を出したり参加したりしてくることもあります。指導者は、そのタイミングを逃さないように、常に視野の隅で観察してください。そして時々誘いましょう。もしかすると参加したくなっているけれど入るタイミングが計れないのかも知れないからです。そして参加した時には、「ありがとう」の言葉を忘れずに。

※チームビルディング：課題解決などの活動を通して仲間意識や絆を持ち、お互いを理解し助け合えるグループを形成するための活動。

コラム

ちょっとしたきっかけで

あぞさん

男女混合でチームビルディング（グループで目的達成を目指す活動）を行っていました。一人の男児の参加意欲が低く話し合いにも参加していませんでした。

チームビルディングが進み、他の子どもたちはチームの意識ができあがりつつありました。彼は相変わらず話し合いには参加しておらず、一人で遊んでいました。

突然彼が私に「ねえ、これできる？」と足を首に巻きつけるようなポーズを見せられました。その体の柔らかさに、私が「すごいねえ、柔らかいね。とてもできないよ」と返していると他のメンバーが気づいて、口々に「すごい」とか「もう一回やって」など声をかけたのです。その時彼はこれまで見せなかった笑顔を見せてリクエストに答えていました。

その後、彼は話し合いに参加するようになりました。自分がチームの中で認められたと感じたのでしょう。きっかけはさまざまですが、他人に認められたと感じることができれば参加意欲は刺激されるのだと感じた出来事でした。

07 男女がすぐに別れて、なかなか交わりません。



もう、小学校の高学年で男女が別れてしまうんですね。もう少し一緒にあって活動してもいいんじゃないかなって思う時がありました。男女の仲をもう少しよくしていくにはどうしたらいいんでしょうか。

(イベント引率の保護者)

あぞさんのヒント



性別に関係なく、協力することを学んで欲しいとの思いからアクティビティ（活動プログラム）を行っているのですから、男女別々では困りますね。しかし年齢が上がって男女の意識が芽生えてくるとお互いの性を意識し手をつなぐこともためらわれてしまい、安心できる同性同士で集まりやすくなるのは当然の結果です。これは発育の過程でとても正常なことです。仲の良い子ども同士で集まるのも同じです。その方が安心できるからです。ですから無理やり男女一緒に活動するようと言っても、安心の壁がなくなって不安になるばかりでうまくいきません。

そのような時は、安心の壁を広げるアクティビティが必要です。最初は分かれていても良いのです。全員で手をつないで輪を作る時も、最初は男女の境目に指導者が入るなど、指導者がつなぎ役になって活動を進めれば良いのです。注意することはお互いが決別するような言葉を使わせないことです。子どもたちは話し合うことを学校の授業でやっているので話し合いはできます。アイスブレイキング※1からイニシアティブゲーム※2と難度を上げていく過程の話し合いをうまく利用して、男女の壁を越えなければ課題解決できないと気づかせることができれば自然と性別を越えたグループになっていきます。時間をかけて進めていきましょう。プロジェクトアドベンチャー（PA）※3など専門のアクティビティもありますので、活用してみてください。

※1 アイスブレイキング：初対面同士が活動を通してグループ形成を行うために、最初にお互いの緊張をほぐすゲーム。凍った心を溶かすという意味でアイスブレイキングと呼ばれる。

※2 イニシアティブゲーム：達成困難な課題に対し、グループで意見を出し合って解決していくゲーム。

※3 プロジェクトアドベンチャー（PA）：イニシアティブゲームなどの活動を通して、お互いの意見をぶつけ合いながら他人の理解と自己の内面を見つめ直し、日常行動の変化やグループ形成を進めるプログラム。

【※1～3のアクティビティ展開例】

- ① まずは、非接触系のアイスブレイキングで雰囲気づくり
- ② 男女混合の数集まりから、お題で集まる仲間探し。集まったら自己紹介
- ③ 円陣で、相手の名前を呼んでからボールを渡していく「ネームトス」
- ④ 円陣で手をつなぎ、一箇所にフープを通し、手をつないだままフラフープを一周させてタイムを競う「フープリレー」
- ⑤ 全員が一枚の布の上に乗し、だれも下りないで布を裏返す「魔法のじゅうたん」
- ⑥ 人数より少ない雑巾を使ってA地点からB地点に移動する「マシュマロリバー」

08 人の前に立つ時どんなことに注意したら
良いのでしょうか。



先日、地域のレクリエーション行事があったのですが、小学生にアクティビティの内容を説明する機会がありました。元気の良い男の子たちが多かったので、ちょっと嫌な気はしていたんですが…。なかなか話を聞いてくれません。

(子ども会役員)

あぞさんのヒント



人の前に立つ状況はいろいろありますが、ここではファシリテーター※や子どもたちに対する指導者のような場合について話します。

態 度

まず立ち方ですが、腕を後ろ手に組んでいるいわゆる「休め」のような姿勢は威圧感を与えるので良くありません。前で腕組みをしているのは防御体制です。コミュニケーションをとる姿勢ではありません。両手は自然に降ろすか、左手で右手を抑えるように前で手を合わせましょう。これは武士が刀を抜く手を抑えて敵意を持っていないことを示す姿勢だったと言われています。

また、バインダーなどを持って立っていると、参加者は何か評価をされている気がして落ち着きません。話をする時はバインダーを置きましょう。

場 所

自分の後ろに太陽を背負ったり、風上に立ったりしないようにします。また聞く人の注意をそらすようなものが背後にないように気をつけましょう。

例えば川遊びの注意をする時に、川を背後にすると、参加者は川の方に視線が移り話に集中しなくなります。

話し方

話をする前に、全体に声が届いているか確認しましょう。事前に話す内容を箇条書きにして口に出して確認し、語りかけるように落ち着いて話をしましょう。

最後に内容のもれや間違いがないか他の指導者に確認しましょう。特に重要な内容は参加者にも復唱してもらいましょう。大人数の場合は、グループに分かれて説明するか、グループのリーダーから話をしてもらいましょう。

※ファシリテーター：促進役。時には課題解決のために必要なグループ活動の助言を行い、グループ形成がスムーズに行なわれるように導く役割の人。課題解決法を教える指導者であってはいけない。

【人の前に立つ時のポイント！】

- ① 話すことを事前に箇条書きしておく。
- ② 全体に声が届いているか確認する。
- ③ ゆっくりで良いのではっきり話す。
- ④ 話し忘れないか他のスタッフに確認する。
- ⑤ 重要なことは理解できたか確認する。

09 グループ単位の活動で、進行に大きな差が出てしまいます。



ある課題を設定して、時間までに解決するようなものだったのですが、すぐに違う話になってしまうのです。他のグループは解決できたのですが…。どんなかわり方があったのか、教えていただけたら幸いです。

(イベントスタッフ)

あぞさんのヒント



イニシアティブゲーム (P.16※2参照) やグループワーク※を行う場合、グループによって解決までの時間に差が生じることは当然の結果ですが、その差が極端にあると、終わってしまったグループはやることもなく自由になってしまうし、遅いグループもそれに気を取られて活動全体に支障が出てしまいます。

早く終わったグループには、異なるバリエーションのアクティビティや別の課題などを用意しておくといいでしょう。ただ、小中学生では同じ学年であれば個々の能力に大きな差はありません。それでも差が生まれるのはチームビルディング (P.14※参照) の違いが大きく関与します。グループの中でリーダー、進行、書記など役割分担ができたグループは課題解決が早く、役割分担ができず意見を出しているだけのグループは遅くなります。

チームビルディングが目的の活動であれば、予め制限時間を決めておき、できた、できないに関係なく活動を打ち切ります。そして早くできたグループが進め方を発表し、各グループは、そのグループがなぜ早く終わったかを考えます。グループワークに必要な意識や行動に気づくことで、グループの成長を促します。またワークの完了を目的とするのであれば、遅いグループに指導者が入り、役割分担についてアドバイスしたり、先にチームビルディングのワークを行ったりして、グループ活動の基盤を作ってから本題のワークに取りかかるようにします。

※グループワーク：グループで話し合いを通して課題を解決する活動などのことである。

コラム

グループワークで大切な「ふりかえり」！

あぞさん

グループワークの後に行う「ふりかえり」は、一人で行なうものではなく、共通の体験をした仲間と共に、お互いの助けを得ながら活動を見直すことで、気づかなかった良いところや学ぶべきところを知る貴重な機会です。

ふりかえりと聞くと何やら暗い反省会の様に感じるかも知れませんが、まったくそのようなものではなく、活動を思い出して気になったところをあげて、その時自分や仲間にながらあったのか、どうすれば良いかななどをあげていきます。

また、活動中に見られた積極的な姿勢や言動など、グループが良くなると思われる行動についてあげていきます。

話し合いが必須ではなく、紙に書いていく方法でもかまいません。また毎行なう必要もありません。大事なことは、あまり長く時間をかけず、参加者が安心して意思表示ができる雰囲気の中で行うことです。

この「ふりかえり」が、次の活動や日常行動に生きてくるのです。

10 大人数へのアイスブレイキングが大変
でした。



大人数の子どもたちを前にアイスブレイキングを一人で行いましたが、人数に圧倒されてしまったこともあり、頭が真っ白になり流れもめちゃくちゃで大変な思いをしました。

(イベントスタッフ)

あぞさんのヒント



頭が真っ白になることは、慣れた人でもよくあることです。特に一人で行うと修正をすることが難しく、流れも乱れてしまいます。

そのような時は、複数のスタッフでアイスブレイキング (P.16※1参照) をすることや、ゲームだけではなくクイズのようなものも用意しておくことも工夫の一つです。また、人数に関わらず全員に話が聞こえるかどうかは大事なポイントで、後ろの人まで話が聞こえるように注意することが大切です。輪の中で話をする場合は自分の後ろには声が届きにくいので、輪に加わったり中を歩き回ったりして全員に聞こえるように工夫します。

また、ゲームの区切りに合図を決めて、そのタイミングでスタッフが替わることもよくあることです。例えば両手を上げて振ったらそれを見た人が真似をするようにすれば、自然に広がってゲーム終了の合図になり、そのタイミングで入れ替わります。

アイスブレイキングは場を和ませることですので、ファシリテーター (P.18※参照) の失敗もありです。気にしないで大胆に行ないましょう。アイスブレイキングやゲームについては青少年センター発行の書籍にも沢山書いてありますので、参考にされると良いと思います。

【アイスブレイキングの進行例】 (詳しくは参考文献などを参照してください)

進行例		具体的な展開例	
導入	○導入はファシリテーターと参加者のコミュニケーションから始めます。	< 1 対全員 > ○ハンドゲーム (指おり、ワイパー) ○じゃんけん (後出しじゃんけん)	
2人組	○2人組のじゃんけん系のゲームから始め、3人、4人と人数を増やします。	< 2人組 > ○じゃんけんお開き ○セブンじゃんけん	
		< 3人組 > ○イレブンじゃんけん ○見えない共通点 ○木の中のリス	
		< 5人～ > ○タイ・タコ ○動物を表現しよう！ ○ZIP・ZAP	
全員	○小グループができれば、 <u>ミニシアティブゲーム</u> (P.16※1参照) やグループ対抗ゲームなども行い、場を和ませていきます。	< 全員 > ○じゃんけん列車 ○キャッチ ○バースデライン ○フープリレー ○反抗期	

11 子どもが活動中にケガをしてしまいました。



活動中に子どものケガはつきものだと思いますが、先回りしすぎて過保護になりすぎてもどうかと思います。どんな心構えが必要ですか？また実際にケガが起きてしまった時はどのような対応が必要ですか？

(イベントスタッフ)

あぞさんのヒント



活動中に事故が起ると、当事者はもちろん他の参加者も少なからず影響を受けて、楽しいはずの活動が台無しになります。事故は絶対に避けなければなりません。それでも事故は起こってしまふことがあります。対応は迅速に行ないましょう。

指導者は救急救命講習を受けたり、下見に行ったり、近くの病院や緊急連絡方法の確認やKYT※1を行うなど、十分なリスクアセスメント※2を行なって準備を整えます。そして、事前に事故対応マニュアルを作成し、指導者で共有しておくことが大切です。

【手順】

- ①まずホイッスルなどを鳴らして全指導者に事故の発生を知らせます。
- ②次に傷病者の一次救命措置と他の参加者への配慮です。予め決めた役割分担に従って一次救命措置に当たる指導者は傷病者の容態を観察し、意識がない、痙攣している、ショック症状がある、出血があるなど救急車の要請を判断します。判断がつかない時は救急車を呼びましょう。同時に他の参加者を別の指導者が誘導し現場から離します。
- ③そして、全体の活動を続けるか待機させるかを判断します。他の参加者も動揺がありますのでまず安心させることが必要です。
- ④速やかに傷病者の家族へ連絡して、状況や病院など情報を正しく伝えましょう。対応者が渦中にいると、状況や、やるべき行動が見えなくなります。指導者があわてないように、対応の前に深呼吸などするのも良いでしょう。
- ⑤保険などの事後処理も忘れずに行ないましょう。

※1 KYT：危険予知トレーニングの頭文字。アクティビティの行われる場所でする事前に行う危険箇所の洗い出し。どのような事故が考えられるか、当事者の立ち位置で洗い出しと対策を考える。

※2 リスクアセスメント：危険特定、危険分析、危険評価の過程全体のこと

コラム

危険なことは徹底排除すべき？

あぞさん

活動しなければ事故に遭うことはないでしょう。しかし青少年活動でなにもしないというのはありえません。大切なのは「危ないからダメ」ではなく、活動を通して安全意識や危険を予知する能力を身につけられる活動です。

強い痛みや身体の一部を欠損するようなケガは絶対に防がなければいけませんが、そのような事故に対する安全対策を施したうえで、ちょっぴりスリルがあって子どもたちがちょっと危ないと感じるような活動を行うことは、安全意識を高めることにもつながります。「危険」と「安全」は、必ずしも反対語の関係ではありません。指導者で危険予知トレーニング(KYT)を行って、安全でかつ危ない活動も時には行ってみてはいかがでしょうか。

12 キャンプの下見は何回するものでしょうか。



子ども会で夏のキャンプの担当になりました。まだキャンプをする場所が決まっていなようなので、探すところから始めなければなりませんが、下見はどのぐらい行けば良いのか心配です。あと何に気をつけて下見をすれば良いのでしょうか。

(子ども会役員)

ひろしのヒント



キャンプの下見は安全管理上、必須です。下見をしないまま、キャンプに臨む団体はあまりないのではないのでしょうか。では下見は、何回するのが良いのでしょうか？これには、残念ながら明確な答えはありません。キャンプ運営の不安が取り除けて、安全に実施できるイメージがつくまで、でしょうか。

と言ってしまくと、なかなか難しいので、強いて言うなら、理想は3回。もしかしたら、3回でも多く感じた人やそんなに時間を取ることができない人もいられるかもしれません。ですので、あくまでも理想とします。ではなぜ3回なのか。

STEP1 場所決めの下見

まず1回目は、どのフィールド、施設を使うかの下見です。すでに何回も同じフィールドや施設を利用しているところがあるなら、この下見は省くことができます。この時は、トイレは洋式か和式か、最寄りの駅（バス停）からどのように行くのか、歩くと何分かかるのか、貸出物品はあるのか、どんなプログラムができるか、危険な動植物はいるのか、緊急時の対応はなど実際にキャンプ地として適しているかどうかの下見です。事前にチェック項目などを作っておくと便利でしょう。

STEP2 当日を想定した下見

実際にキャンプ地が決まったら、2回目の下見です。実際の移動手段で、同じ時間、曜日で下見をすることをお勧めします。理由は、交通状況のイメージがつかみやすいからです。またこの時は、事前にイメージしておいたプログラムもできると良いです。施設内の移動時間もイメージがつかみます。

STEP3 直前下見

3回目は、キャンプ実施日の1週間前にできると良いです。これは気温や自然状況の確認のためです。キャンプを行う場所は、自然豊かな場所です。自然は2週間や3週間で大きく変化していきます。そのため寒くないか暑くないか、危険な箇所は増えていないかなど確認が大事です。

また下見をする際は、キャンプ地のスタッフや自治体から安全に関する情報を仕入れておくことを忘れないでください。その土地特有の気をつけるべき情報は、スタッフや自治体を持っていることが多いです。

【下見チェックリスト（例）】

☐ トイレの有無（洋式、和式、多目的等）	☐ 危険箇所（活動場所、移動ルート）の確認
☐ 歩行ルート（最寄り駅からの歩行）時間	☐ 最寄りの病院の確認（日中、夜間、休日）
☐ 雨天時の活動場所	☐ AED（自動体外式除細動器）の有無
☐ 主なプログラム	☐ 食材の持込、ゴミ処理について
☐ 荷物の配達受取は可能か	☐ 冷蔵庫、飲用水の有無

13 キャンプの参加者に持ち物のイメージが伝わりません。



キャンプ前に、参加者（保護者）から当日の持ち物等の問い合わせが多くありました。そしてキャンプ当日、実際に持ってきたものが違って困った経験があります。

（キャンプ担当者）

ひろしのヒント



宿泊を伴うキャンプで参加者から事前によく問い合わせがあるのは、持ち物についてです。人によってイメージすることが違うため、仕方がないですね。

事前説明会がある場合

参加者向けの事前説明会をする団体の場合は、その時に『持ち物の実物』を準備しておく、と、視覚でイメージが伝えやすくなります。またキャンプ当日の好ましい服装（野外炊事、川遊び、登山時の服装など）も伝えられます。それをやるだけでも、キャンプに慣れていない参加者にとっては、安心につながります。

事前説明会がない場合

事前説明会ができない場合は、キャンプ参加者に発送する資料で持ち物を伝える場合が多いと思います。その際に、文字だけでなく、写真やイラストなどを用いると、よりイメージが伝わりやすくなります。また「これは持ってこないで！」も写真などで伝えるとわかりやすいです。例えば、サンダルなどはケガするのでダメなど。

さらに、ただ単に持ち物を書くよりも、どういう場面で、どのように使うかも記入することで、よりイメージが伝わりやすくなります。例えば「軍手は、野外炊事の時に使用します。綿100%のものが望ましい」などです。また持ち物の問い合わせで多いのが、どういうところで購入できるかという質問で、その情報もつかんでおくことで、より丁寧に参加者に情報が提供できると思います。

主催者側もイメージと違う持ち物で来られると困ることがあるので、わかりやすく伝わる工夫を心掛けることが大事です。

【持ち物チェックリスト（例）】

持ち物	数	備 考
☐ 1日目の お弁当	1つ	ごみの持ち帰りをお願いします。お弁当のアルミホイル・空き容器等も持ち帰りの対象となります。弁当箱・水筒を水洗いすることは可能です。
☐ 水筒	1つ	ペットボトルでも可。1ℓ程度のもの。
☐ タオル	2枚	汗拭きや入浴時に使います。
☐ 雨具	1着	上下セパレートタイプのカッパがあると便利です。
☐ 室内履き	1足	屋内での活動の際に使います。
☐ 着替え類	日数分	野外活動に適した服装（スカート不可）、履きなれた運動靴など ※長袖、長ズボンは、虫よけなどに便利です。 ※事故防止の観点から綿素材の長袖、長ズボンがお勧めです。野外炊事やキャンプファイヤー時では、化学繊維のものは火に近づけると溶けて大やけどの原因となりますので避けてください。
☐ 軍手	1組	野外炊事で使います。（綿100%で手のひらに滑り止めがついていないもの）
☐ 入浴セット 洗面用具	1セット	石鹸・シャンプー・歯ブラシ・歯磨き粉・ポケットティッシュ等。 ※ドライヤーはありません。
☐ 懐中電灯	1つ	夜の移動時に使用します。予備電池もお持ちください。
☐ 常備薬	適宜	常備している薬があればお持ちください。虫除けスプレー・虫さされ用軟膏等必要な方はお持ちください。

14 スタッフの目印はどのようなものがありますか。



親子のキャンプで、誰がスタッフかわからないと言われてしまいました。

(キャンプスタッフ)

ひろしのヒント



スタッフとして統一の服装や目印となるものがあれば、一目で子どもにもわかりやすいし、一体感も生まれやすいのではないのでしょうか。子どもだけのキャンプの場合は、集合解散時に保護者の方の目印にもなるのでわかりやすいです。

服をチョイス！

服であれば、ベストがオススメです。ベストなら、季節に関係なく、上に羽織ることができるので良いです。お揃いのユニフォームを揃えるのが難しければ、スタッフが着ている服の色を揃えるのも一案です。夏場だと、Tシャツよりも同じ色のポロシャツを着ているだけでもピシッと揃っている雰囲気が出るかもしれません。

服以外では！

服を揃えるのが難しい場合は、名札の色や名札ケースの紐色、バンダナなどの目印で揃えることもあります。ただし一見してわかりにくい難点はあります。会議室などの限られた空間であれば、上記のような目印でも十分でしょう。

ただスタッフとしての目印が無くてもキャンプとしては成立します。何が何でも揃える必要はないと思います。要は参加者や周りにいる人に『スタッフ』というのが理解されれば良いと思います。何度も関わっているスタッフになると、子どもも顔を理解しているので、問題はないでしょう。初めてスタッフをする人だと、スタッフの目印を付けることで子どもたちや保護者にもまずは安心感を与えることができるのではないかと考えます。

コラム

移動時に子どもたちを見失わないために

し～ちゃん

公共交通機関の利用や観光地等に出かけたりする場合に、子どもたちから目を離すと、人混みの中に子どもたちがまぎれてしまうことがあります。当然離れないよう話をしたり、集団での歩行を練習したりする場合もありますが、突然の出来事に動揺したり、歩く速度が遅くなったりした時に子どもたちを見失うことがあるかもしれません。

そのようなことが起きる前に、アウトドアでよく安全を確認し合うバディ（2人一組）を作って、一人で行動させないようにすることも一つの方法です。

また目印として名札をつけることがあるかもしれませんが、上着等に隠れてしまったり、背後からはわからなかったりする場合もあるので、リュックサックの肩の部分等にリボンやバンダナ等をつけることも工夫の一つです。

何はともあれ、まずは見失わないようにするには、どのようなスタッフ体制、歩行などをしたら良いか、そして子どもを見失ってしまったらどのように対処するのか、考える機会を持つことが大切かもしれません。

15 活動に必要な道具のレンタルができる場所
はありませんか。



キャンプの活動で川遊びを考えています。安全上ライフジャケットが必要だと思
っていますが、購入する予算がありません。レンタルする場所がありますか。

(キャンプスタッフ)

ひろしのヒント



キャンプをするとすると、それなりに道具が必要になります。テント泊をするなら、テント、寝袋、マットなど。野外炊事を行うなら、鍋、お玉、包丁、まな板など。団体が自前で道具を持っているなら、活動に支障はきたさないでしょう。無い場合は、道具のレンタルが可能なキャンプ場や施設を探すのが、手取り早いでしょう。公共の施設の場合は、レンタル料も安価にすむことが多いです。

川遊びの場合

キャンプが多い夏のメインプログラムとして、取り入れられるのが川遊びではないでしょうか。川遊びは、楽しい反面、命に直結するプログラムなので、ライフジャケット（以下PFD※1）などの安全対策はしっかりとることが主催者側、指導側の責任になってきます。利用施設でPFDの貸し出しがあるところなら借りることは可能でしょうが、貸し出しを行っている施設はあまり多くはありません。PFDは、『NPO法人 川に学ぶ体験活動協議会（通称RAC）』やネットサイトで貸出のサイトがあるので、問い合わせしてみてください。PFDの他にヘルメットや救助用のスローロープ※2などの貸出もあります。ただし講習会等に参加して、正しく道具を使う知識を得ておくことも必要でしょう。

また使用頻度が高い道具などは、助成金（『子どもゆめ基金』や『日本財団』など）をうまく活用して揃えていくのもいいかもしれません。その際は、保管場所が別途問題にはなっていないと思いますが・・・。

安全にキャンプを実行するには、道具も大事な要因であることは間違いありません。

※1 PFD：Personal Floatation Deviceの略。直訳すると、個人用浮力装置となるが、日本では一般的にライフジャケットや救命胴衣と呼ばれている。

※2 スローロープ：落水者を救助するための水に浮くロープ

【レンタル・助成金情報】

NPO法人 川に学ぶ体験活動 協議会（通称RAC）	川に関する情報提供や研修などの他、川での活動に必要なライフジャケット、スローロープ等の貸出も行っています。
神奈川県立 青少年センター	グループワークやコミュニケーションゲームの冊子やDVDの提供、用具の貸し出も行っています。
子どもゆめ基金	国と民間が協力して子どもの体験・読書活動などを応援し、子どもの健全育成の手助けをする基金です。
日本財団	幅広い分野で年間を通じて複数の助成プログラムを行っています。

※詳細については、各団体にお問合せください。

16 キャンプの安全対策はどこまですれば良いのですか。



キャンプの引率をすることになったのですが、他のお子さんを連れていくので、事故などいろいろと心配してしまいます。どのようなことに気をつけたら良いのでしょうか。

(引率の保護者)

ひろしのヒント



キャンプに対する安全意識は高まりつつあります。下見を行う、ケガをした時の対応、ハチに刺されないために気をつけること、万が一刺された時の対応、その他危険な動植物への対応、保険への加入、救急法のトレーニング、救急病院までのルート、ファーストエイドの準備など、もしもの時に備えてキャンプを行う団体が増えてきました。ケガを出さない工夫はもちろん行いますが、万が一のことが起こるのがキャンプです。リスクマネジメントを徹底し、万が一事故が起きた時のためにスタッフ用の事故対応マニュアルを作っておくことが必要です。

災害時の対応

当日のケガ等への対応の意識は高まりつつありますが、それ以外にもキャンプを行う上で考えておかなければならないことがあります。それは、災害時の対応です。

キャンプ中に地震が起きた、台風、降雪等で公共交通機関が止まってしまったなど、キャンプ地から帰れない場合を想定しておくことも必要です。電話が不通の場合は、災害伝言ダイヤルや SNS を活用するなど考えられるでしょう。ブログなどを通じて、保護者に現状を伝えることで安心感を与えることもできます。

またキャンプ地では問題がない状況でも、参加者の自宅が被災した場合はどうするかなど、対応を考えておく必要があります。突然やってくるのが天災です。いろいろな場面を想定して、事前にシミュレーションしておくとういでしょう。

【安全チェックリスト（例）】

項 目	内 容
< 事 前 >	
□傷害保険の加入	参加者、スタッフの万が一に備えて、保険へ加入する。その際は活動内容と保険内容を確認しておく。国内旅行傷害保険など。
□下見の実施	下見チェックリスト（P.26）の項目を参照。
□アレルギー等の確認	食物アレルギーやその他疾患、既往病の有無を確認。可能な範囲で対応を行う。
< 当 日 >	
□体調不良者の確認	宿泊の翌朝にそれぞれに確認する。口頭での確認でも良いが、宿泊が長くなると、確認項目を書いた紙を用意しておくことで参加者自身が申告しやすくなる。
□便通の確認	
□睡眠の確認	
□食事量の確認	
< 災 害 時 >	
□避難経路の確認	火災、地震を想定して、利用施設からの避難経路の確認及び、非常時の集合場所も含めて参加者への周知を行う。なお災害の有無を問わず、緊急連絡先の確認は必須。
□集合場所の確認	
□参加者の緊急連絡先	

17 野外炊事で気をつけることはありますか。



キャンプで野外炊事の担当になり、野外炊事＝カレー作りのイメージで考えていますが、気をつけることはありますか。

(子ども会役員)

ひろしのヒント



キャンプの王道プログラムと言えば、野外炊事ではないでしょうか。定番のカレーの他にはうどんやピザ、パン作りなど、薪を使ってみんなでご飯を作る活動は楽しいものです。

王道のプログラムだからこそ、考えておくことがあります。それは、『何のために』野外炊事を行うのか、それはキャンプの目的においてどういう位置づけなのか、です。

ついつい口出しや手出しをしてしまう

子どもたちに体験させたいとしながらも、手際が悪い、プログラムが押してしまうなどの理由から、薪のくべ方、火付けにスタッフが手出し口出しをして、子どもたちの体験の機会を奪ってしまっているケースがあります。

- ① そうならないためには、薪のくべ方、火のつけ方を実演して、子どもたちに教える必要があります。
- ② プログラムが押してしまうということに関しては、そもそも最初から時間設定に問題があるからです。失敗もできる（成長できる）時間を見越して野外炊事のプログラム時間を設定しておく余裕を主催者側は持っておきたいですね。

炊事中に子どもたちが遊びに行ってしまう

野外炊事中に子どもが遊びに行ってしまうケースがあります。これにはいろいろな理由があるとは思いますが、よくあるのが「やることがないということ」です。役割を持って余すこと（遊びに行ってしまうなど）をしてしまうのは、ある意味仕方がないことだと思います。そんな時は叱るのではなく、「ご飯を食べるところの掃除をする」「食器を準備する」「薪を片付ける」など、子どもたちに役割（仕事）を与えることです。野外炊事の1グループの人数、役割分担を事前に考えておくことが大事です。

役割に没頭してしまう

例えば薪割りや火係りなどをずっとやり続ける子の場合は、他にやりたい子がいない、状況が許されるのであればさせてあげても良いと思います。夢中にやれることがあるのは、良いことだと思います。ただし他の子たちにも経験を積ませたいと考えるのであれば、例えば「あと何本ね」や「あと何分ね」のように具体的に終わりのことを告げると良いです。そしてその子には、また違う役割を与えることが大事です。

野外炊事ひとつとってもいろいろなケースがあるので、事前にそういうケースをスタッフ間で想定しておいて、実際に起きた時にどうするかシミュレーションしておくことで当日の活動がスムーズに進むことでしょう。

18 早起しすぎる子どもがいます。



キャンプに小学生を引率した時、何の気なしにトイレに行ったところ、（外にトイレがある宿泊施設だった）まだ夜明け前だというのに、外を散策している子どもたちに遭遇したのです。「まだ起床時間じゃないから、時間まで部屋にいてね」と声をかけたところ、「別にうるさくしているわけじゃないからいいじゃん」と切り返されてしまいました。どう対応すれば良いのでしょうか。

（キャンプボランティア）

あぞさんのヒント



気持ちが高揚してしまい、早起きしてしまう参加者は、大人子ども関係なくいると思います。特に子どもの場合、起床時間の数時間前に起きてしまい、外を歩き回ったり、大声で話をしたり、寝ている参加者を起こしにかかる場合もあります。

引率するスタッフとしては、自分たちの睡眠時間も取りたいし、目を離すわけにはいかないし、頭の痛い問題ですね。しかしキャンプなど宿泊を伴うイベントは、参加者にとって非日常の世界なのです。

＜起きてしまった参加者への対応＞

起きてしまった参加者に、「まだ起床時間の前だから寝ていなさい」と言ってもムリな相談です。早番を決めるなどして、「まだ寝ている人や寝たい人がいるから起こさないように静かにすごしましょう」と言葉をかけ、日の出を見るとか、夏に冬の星座を眺めるとか、日常にはない体験をさせるチャンスととらえましょう。コミュニケーションをとれる時間でもあるので感想や困りごとがないかなどを聞いてみましょう。スタッフの手伝いをしてもらうのも参加者にとって特別感があります。ただ、その日の活動に支障が出ないように配慮しましょう。

【言葉かけの例】

コメント	補 足
まだ寝ている人や寝たい人もいるから起こさないように、静かにすごしましょう。	同室の参加者が全員起きている場合に有効です。他の部屋の参加者に配慮します。
他の人を起こしてしまうから、こちらに来て話をしようよ。	同室の参加者が寝ている場合、室内で静かにしているのは難しいので、外や別室に誘いましょう。
星が見えるよ。観察しようか。それにもうすぐ日の出だから、一緒に見ようよ。	夜明け前は夏なら冬の、冬なら夏の星座が見えます。子どもには珍しく感じるようです。

19 ホームシックになる子どもへの対応は
どうすれば良いですか。



2泊3日のキャンプで、班の中で一番年下の参加者がホームシックになってしまいました。どのように対応したら良いでしょうか。

(キャンプボランティア)

ひろしのヒント



宿泊を伴うキャンプは、非日常体験です。普段しないテント泊や、家族や友達とも違う仲間と一緒に過ごす体験は、ワクワクすることもあり、新たな発見があり、楽しくもあります。そのキャンプの経験が、子どもたちを成長させていきます。

しかし普段と違う環境では、ふとした瞬間に不安に襲われることがあります。それがホームシックにつながっていきます。キャンプだと夜の活動中に起こることが多いです。日中の野外炊事やレクリエーションのように『動』のプログラムでなく、夜になって景色の雰囲気も変わり、落ち着いた『静』のプログラムになることや、また日中の疲れが出てくるのも要因の一つです。

ホームシックになる前に

まずは子どもに、このキャンプが楽しいと思ってもらうことが大事です。そのためには日中の活動で、楽しい雰囲気を作り出すことです。プログラム自体の楽しさはもちろん、同じグループの人間関係も楽しさを作り出す要因なので、グループが円滑に回っているか（うまく溶け込めているか、話をする相手がいるか、一緒に行動している相手がいるかなど）を班につくスタッフはもちろん、周りにいるスタッフが気を配る必要があります。

ホームシックになってしまったら

ホームシックになった場合は、他の子どもの輪から離れて、スタッフが寄り添ってよく話を聴いてあげることです。「何が不安なのか?」「どうしてほしいのか?」など。対応するスタッフとホームシックの子どもとの間で関係づくりをする必要があります。そのためには、話をよく聴いて、少しでも不安を取り除いてあげることが大事です。そして少しずつ勇気を与えるように声をかけてあげ、サポートしていくことです。結局ホームシックを乗り越えるのは、子ども自身です。スタッフは、そのサポートをすることしかできません。

「お母さん（お父さん）に会いたい」と子どもが泣き続けるので、電話をして子どもがお母さんと話をしてしまうと、『日常』に戻ってしまいます。そうなると一層帰りたい気持ちを増幅させてしまうこともあるので、注意が必要です。

ホームシックを乗り越えたという経験は、子どもにとって更なる成長につながるの、良い機会だと思って、乗り越えることができるようにサポートしていきましょう。

【言葉かけの例】

コメント	補 足
さびしくしていないか家族の人も心配していると思うよ。	家族の言葉を代弁する気持ちで
実は、私もさびしがりやなんだ。	子どもに慰めてもらう気持ちで
笑顔で帰ってきたら、家族の人も喜ぶと思うよ。	帰宅後の気持ちを考えさせて
今日の活動で楽しかったことや頑張ったことは何だった?	楽しいことを思い出させるのと頑張ればできることを応援する気持ちで

20 乳幼児専用スペースに入って遊ぶ小中学生
がいます。



「ここには入っちゃだめだよ」といっても、「なんでいけないんだよ」といって、全く動こうとしません。どこで遊んでもいい、自由に遊んでもいいと小中学生は思っています。それは間違いではないのですが…。

(児童館職員)

いえもんのヒント



児童館など放課後の子どもたちの室内遊び場では、「乳幼児専用スペース」などと名付けた未就学児の遊び場を確保しているところがあります。小学生以上の立ち入りを禁止しているところがほとんどだと思いますが、そんな場所で小中学生が入って遊ぶこともしばしばあると思います。

乳幼児専用スペースで遊ぶ小中学生の姿を目の前にした時に、まずは「なぜ彼らはここで遊びたいのか」を考えてみましょう。そして本人に聞いてみましょう。もしかしたら「ただ入ってみたかったから」という単純な理由かもしれませんし、「用があって入っていたら遊びになっちゃった」といった反応が返ってくるかもしれません。どんな内容であれ、彼らにとってはきちんとした理由があるはずなので、まずはその主張を否定せずに受け入れましょう。そのうえで、乳幼児専用スペースという場所の趣旨をふまえて、「なぜ小学生以上が入って遊んではいけないのか」をわかりやすく丁寧に伝えることを心掛けましょう。

一方では、「自分を見てほしい」「構ってほしい」とアピールするための行動ではないか、という見方もできます。威圧的な注意や叱責は、かえって彼らの行動を悪い方向へ助長させてしまうかもしれません。例えば「もお～！こんなところで何してるんだよ～！」といった調子で話しかけることで、彼らと対等な目線で接することが大切です。

また、その時に忘れがちになるのが、その場に居合わせた保護者や子どもに対してのフォローです。小学生が乱入してきた時は、不安や恐怖といった気持ちでいっぱいだったかもしれません。乳幼児親子が安心できる空間かと思いきや、小学生以上の子どもも入ってきて走り回られては、保護者にも緊張が走るでしょう。「大丈夫でしたか？」「ちょっと騒がしくなっていましたね」と少しばかり親子との会話をし、保護者の不安や緊張を取り除いてあげることが大切です。

21 仕事で忙しい時、子どもから
「一緒に遊ぼう」と言われてしまいます。



来館者の少ない時間帯に雑用などを入れるようにしているのですが、たまっていた事務仕事が終わらないうちに子どもたちが来館したり、子どもと遊んでいる時に大切な用事が入ったりすることも。これって、自分のタイムマネジメントに問題があるのでしょうか…。

(児童館職員)

いえもののヒント



子どもからの遊びの誘いは大変嬉しいですが、その日に限って、締め切りが迫る書類作成があったり、どうしても外せない会議が入っていたりすると心苦しく感じるものです。子ども施設スタッフの本来の業務は子どもと遊ぶことではないのですが、子どもとの関わりが日常業務になる場では、どちらを選択するか葛藤する場面であると思います。

ここでは、あえて「その仕事は本当に今やるべきものなのか？」と考えてみると良いかもしれません。私自身の経験から、子どもと一緒に遊ぶ、おしゃべりする、一緒にごはんを食べるなど、子どもと同じ時間を共有することが、その子との関係づくりの第一歩だと考えています。今、目の前に抱える仕事の息抜きと考えて、5分10分だけでもその子どもとの時間に見ませんか。ただ、その時についつい口に出してしまうのは、「ちょっと待って…」や「あとでね…」という言葉です。子どもにとっては「今」一緒に遊びたいという気持ちなのに、「ちょっと」という反応をされると、その時間は5分なのか5秒なのかわかりづらい話なのです。例えば、「あと5分だけ待っててもらえる？」と具体的な数字を出すなどして、反応の仕方を工夫してみましょう。

しかしながら、どうしても外せない会議などが入っている場合は、その会議を欠席しても子どもとの時間をつくることは不可能に近いでしょう。その時は、「ごめん！今日はどうしても無理なんだ」と素直に謝りつつ、「次はいつ来る？その日に遊ぼうよ」と別の日に遊ぶ約束をするのも一案です。ただ、その日まで抱えている仕事を少なくしておく必要があるでしょうし、その日になって「やっぱり無理だった」は禁物です。子どもが相手とはいえども、“できない約束はしない”ことが大切です。

22 刃物を使わせることに不安があります。



使える道具が増えれば、クラフトのメニューも増え、遊びの幅も大きく広がりますが、子どもが大ケガをしている場面や、保護者が動揺しているシーンなどを想像すると、刃物を使わせることにためらってしまいます。注意喚起も、どこまで具体的にしたら良いのでしょうか。

(プレーパークスタッフ)

いえもののヒント



のこぎりや小刀を使った工作やものづくりは、他の遊びよりも子どもの豊かな感性や創造力を育みます。また、きり傷などの軽度のケガを通して、「ケガをしないように、次は〇〇してみよう」といった彼らの危険予知能力が高まるきっかけにもなります。しかし、刃物の取り扱いを一步間違えると大ケガにつながりかねないので、スタッフによる安全管理には一層の注意が必要です。

基本的に、刃物は「自分や相手を傷つけられる道具」であり、その注意喚起の方法は慣れている子も慣れていない子も同じです。実際どのように伝えるかはさまざまですが、その一例を紹介します。

まずは、扱う刃物の前に手や指を置かない、利き手ではない方の手に軍手をする、隣の人と少し距離をとる、といった必要最低限の情報を伝えましょう。

次に、そのうえで「では、使っている時に刃物の前に手や指を置いたらどうなるかな？」と子どもたちに聞いてみましょう。大抵の子どもたちは、指が切れる、血が出て大ケガになるといったパターンを想像すると思います。文字や言葉で道具の使い方や禁止事項を伝えるだけでなく、「なぜだめなのか？」「〇〇するとどうなるのか？」など自分で物事を考える時間を少しつくることで、受け身な注意喚起ではなくなってきます。また、同時に正しい道具の使い方を伝えることで、道具を大切に使う意識も育みたいですね。

とはいえ、子どもは大人が予想しない行動に出たり、注意喚起したのに同じことを繰り返したりすることもあります。常に大人が付き添い、その行動がケガや道具の破損につながらないか、刃物を扱うのに適切な環境であるかを見守ることが大切です。

刃物の取り扱いに対するリスクマネジメント（危機管理）は、スタッフの中で共通認識や一定の方向性を導き出しておくことが大切です。

【リスクマネジメントワーク】

ここで紹介するワークの方法は、複数人のスタッフで取り組むことを想定していますが、場合によっては一人でも取り組むことができます。あらかじめ、付せんや模造紙、マジック等を用意しておきましょう。

STEP1	子どもがどんな場面でどんな刃物を使うのか。 場面に応じて使用する刃物はさまざまあると思います。主題について、付せんを使って思いつく場面や刃物の種類を書き出してみましょう。その後、各自から出された付せんを場面ごとに分類・整理して全体で意見交換していきます。
STEP2	場面ごとに扱う刃物によって、どんなケガが起こるのか。 刃物を使用することにケガは付き物です。単に切り傷・すり傷ではなく、「〇〇の時に××のケガをした」というような具体的な例を、付せんに書き出してみましょう。その後、場面ごとに分類・整理して全体で意見交換していきます。
STEP3	起こりうる大きなケガを防ぐために、スタッフにできることは何か。 ケガによっては、救急車を要請するほどの重大な事故につながる例もあります。ここでは、STEP2で出た大きなケガをピックアップし、それを未然に防ぐために何をすべきかを付せんに書き出してみましょう。その後、スタッフごとに発表し、全体で意見交換していきます。

23 気軽にできない遊びをしたいという声に、
どう対応したら良いでしょう。



子どもたちから遊びの提案がありましたが、スタッフの人数が足りないのと来館者が多かったことから、ちょっと無理だと断ってしまいました。その時の子どもたちの悲しそうな表情が、ずっと気にかかっています。

(プレーパークスタッフ)

いえもののヒント



子どもたちにとって、鬼ごっこやおままごとなどの遊びは日常茶飯事でしょう。時には大きな道具を倉庫から出したり、広いスペースを占有したり、準備に時間がかかったりするなど、なかなか気軽にはできない遊びをやってみたいと提案されることがあると思います。しかし、その日のスタッフ体制が確保できていない、児童館やプレーパークなどは他の来館者が多い中で安全管理が難しいなどの理由で、子どもの「やってみたい！」という気持ちに應えることが難しいケースがあるでしょう。

日常の子どもの「やってみたい！」という声にどう向き合うかは、大切なことですが容易ではありません。基本的な構え方としては、例え実現不可能なものであっても「それは無理じゃない？」と、大人のものさしで計らないことが大切です。実際に、自分自身の考えた遊びができるかできないかは本人が決めることであり、大人が決めることではありません。「実現不可能だな…」と思っても、まずはその子の声を聴き、一緒に考え、時には大人自身の意見も交わしながら、本人が意思決定するプロセスに寄り添いましょう。決して、大人から流れをつくらずに、本人の意思決定を「待つ」ことが大切です。

準備などに時間を要する場合、また時間をかけられる場合は、そんな構え方で子どもの声をじっくり聴くことができますが、「今からこんな遊びをしてみたいんだけど…」という子どもの声があがった時、どう対応しましょうか？

前述の問題を理由に「今日は無理！」と答えてしまうのは、いささかもったいない気がします。スタッフ体制、安全管理上の問題など、いわゆる大人の都合で子どもの自由な遊びが制限されてしまうのは、面白くありません。「今」というタイミングが難しい場合、私なら「今日は何時まで遊ぶの？」と尋ねます。その子が施設に滞在する時間の中で、折り合いをつけながら、どのような遊びならできるかを一緒に考えていきます。子どもたちの豊かな発想で遊びが発展していくために、私たち大人にできることは何かを考えるゆとりを持てたらいいですね。

24 下ネタを連呼する子どもがいます。



子どもたちが下ネタを連呼して、おもしろがっていました。最初は聞こえないふりをしていましたが、大声なので他の来館者にも聞こえています。幼児を連れてお母さんも困った顔をしてこちらを見えています。このような時はどうしたら良いのでしょうか。

(児童館職員)

いえもののヒント



小学校高学年から中学生の男子にありがちな行動ですね。思春期を迎える彼らにとっては、自分自身の心と身体の変化を自ら感じていて、性への興味関心は日々増えています。エッチな言葉を辞書で調べて意味を知ったり、言葉を実際に発音したりすることで興奮することがしばしばあります。教育上よろしくないように感じて真っ向から否定してしまいそうになりますが、「彼らが大人に成長していくためのステップである」と一歩引いて考えて接していきましょう。その行動を否定してしまうと面白がって、かえって助長させてしまうこともあります。

とはいえ、下ネタを聞くことはあまり気分のいいものではありません。下ネタを聞いた自分が「聞いていて嫌だな」と感じたら、まずは自分自身のその気持ちを伝えてみましょう。英語の一人称である I（私）からのメッセージを伝えるという意味で「アイ（私）メッセージ」ともいいますが、「私はそれを聞かされると不愉快な気分になるからやめてね」と理由をそえて相手に伝えてみましょう。ここで大事なことは、事の善悪を決めることなく、その行動を見聞きした他者（私）にとって、快か不快かという観点で判断します。子どもたちは、こうした快・不快のメッセージを受け取りながら、どのように他者と接していけば良いのかを考えていきます。

また、同時に周囲の人たちへの配慮も必要です。仲間内でこそこそ話して面白がるのではなく、周囲の人たちに嫌でも聞こえるように大声で叫んでみたり、わざと異性や年下の子どもの目の前で言ったりすることもあります。そうした時には、「まわりの人が聞いていて嫌な気分になるからやめてね」「異性の目の前でそんなことを言うなんて気分良くないな」といった形で、アイ（私）メッセージを伝えてみましょう。状況によっては、興奮が押さえられないこともあるので、あえて環境を変えることで気持ちを落ち着かせることも大事になってくるでしょう。

25

子ども同士のケンカにどう対応すれば
良いでしょうか。



子どもたちの間では、よくケンカが起こります。見て見ないふりをするわけには
いけないので、仲裁に入ることもしばしばありますが、どうしたらうまく解決さ
せることができるのでしょうか。

(プレーパークスタッフ)

いえもののヒント



子ども同士で起きたケンカをどう仲裁して円満に解決するか、対応が難しく感じる場所です。しかし、起きたケンカは誰の問題なのでしょう。間違いなく、大人ではなくその子どもたち本人の問題です。つまり、子ども同士で起きたケンカを、大人が一方的に介入して円満に解決しようというのは、基本的にお節介な話なのです。

ケンカを認知した時

一口に“ケンカ”とはいえども、具体的には怒りの感情を込めた言葉を言い合う口ゲンカ、腕力をぶつけあう暴力的なケンカの2種類があると思います。ケンカが起きた時の対応は、この2種類で大きく分かれるでしょう。

口ゲンカの場合、基本的には大人が介入する必要性はないと思います。ケンカが起きていることの認知はしますが、遠くで様子を観察したり、わざと近くを通るふりをしながら「どうした？」と声をかけたりします。ただ、一方に対して威圧的になっている、誹謗中傷する言葉が飛び交うなどの時は、スタッフ自身の「アイ（私）メッセージ（P.50参照）」を伝えましょう。実際に介入しなくとも、“気にしているよ”というメッセージを本人に発信することが大切です。

暴力的なケンカの場合は、それを認知した時点で、問答無用で介入する必要があると思います。

ケンカを仲裁する時

まずは、本人たちの主張やまわりで見ていた人たちの話から、実際の状況や経緯がどのようなものであったかを正確に理解します。次に、彼らの話を整理しつつ、話の落としどころを探っていきますが、ここで大切にしたいのは、大人が決めるのではなく子どもたちがどうしたいかを決めることです。「ごめんなさい」とお互いに謝って終わることは、確かに円満な解決方法ではありますが、それを押しつけてしまうことは大人のエゴイズムでもあります。子どもによっては、「謝ってもらわなくてもいい」と言って、ケンカ別れで終わるケースもあるでしょう。でも、お互いがそれで納得しているのならばそれで大丈夫なのです。その日その場で解決しなければならないことは稀で、無理矢理にでも解決しなくてはいけないという固定観念は捨てた方が良いでしょう。

また、両者や一方の子どもの興奮状態が収まらず、“殴らないと気が済まない”という気持ちにまで高まっている時があります。そんな時、一方の子どもを、相手の子どもの姿が視界に入らない場所まで連れ出すことで、興奮状態が急速に収まる場合もあります。環境を変えることでお互いの気持ちをクールダウンさせ、そのうえで本人たちと話をしていけたら良いですね。

ケンカが収まったあと

ケンカが収まって一件落着、といたいところですが、この案件についてスタッフ全員でふりかえりをしてみましょう。仲裁していたスタッフやまわりにいたスタッフはどんな気持ちだったのか、あのタイミングで仲裁すべきだったか、もう少し見守る必要があったのかなど、今回の対応をもとに意見交換を深めましょう。

ケンカへの対応に答えはありませんし、仲裁するタイミングも関わり方もケースバイケースです。施設の方針や現場のスタッフの価値観によって、対応が変わることもあります。その都度、スタッフとのコミュニケーションを通して、子どもにとっての最善の利益のためにできることは何かを考えていきましょう。

26

子どもたちから、ケンカの解決を自分たちで
したいといわれました。



子ども同士のトラブルの仲裁にのりだそうとしたところ、「自分たちで話し合って解決するから、向こうに行ってくれ」と言われました。どんなふうに見守っていたら良いのでしょうか。

(児童館職員)

いえもんのヒント



子ども同士で起きたケンカを、大人の力を借りずに自分たちで解決と言い出すことは大変素晴らしいことだと思います。とはいえ、本当に自分たちの力で解決できるのかと不安に思うところもあるでしょう。彼らを信じて、「じゃあ、みんなで話し合ってね」と言ってその場を後にしたとして、しばらく経ってから様子を見てみると、さっきから状況が変わっていないというケースもあるでしょう。立ち会う大人はただ見て見ぬふりをするのではなく、“気にしているよ” “私はここにいるよ” というスタンスを子どもに示しつつ見守る、という立ち位置が必要な場合があります。

以前、私も子どもから「自分たちで話し合いたいから、スタッフはあっちに行っていて」と言われたことがありました。その後、遠くから逐一様子を観察していたのですが、子ども同士で何か話し合っている様子は伺い知れても、彼らの表情までは読み取れず、どのような雰囲気ですぐ話し合っているのかもわかりません。そこへ別のスタッフが通りかかり、一方の子どもが辛そうな表情をしているのを見て、2人の話し合いに介入しました。そのスタッフが互いの話を聞いてみると、一方の子どもから「ふざけんよ」「謝れよ」と言われていて、もう一方の子どもは、それに対して何も言い返せずに心苦しい思いをしていたようです。

あとでふりかえてみると、「自分たちで話し合いたい」という子どもの思いを尊重するべく、その場の流れに任せていたところがあったと反省しました。遠巻きで彼らの様子を観察していたばかりに、細かな子どもの表情まで読み取れず、「自分たちで話し合っている状況は変わらない」「誰か助けてほしい」という子どものSOSをキャッチできなかったのです。

仮に、子ども同士のケンカを子ども同士の話し合いで解決することに委ねたとしても、その場の流れも引き渡してしまわないようにしましょう。話し合いの場の進行は子どもたちに任せるとしても、いざとなった時にSOSをキャッチできたり、再び介入したりできるよう見守りをしていくことが大切でしょう。彼らが話し合いをしている時も、お互いの子どもの気持ちに寄り添い続け、“気にしているよ” というメッセージを発信していきましょう。

27 自分の思いどおりにいかないと、人やモノに当たったり暴れたりします。



ちょっとしたことでかんしゃくを起こして、大声を上げながら暴れる子どもがいます。ふだんは大人しいのに、いったん火がつくと手がつけられません。止めに入った職員のメガネが割れてしまったことも。

(プレーパークスタッフ)

いえもののヒント



近年、子どもたちを取り巻く社会は急激に変化し、さまざまな場で**暴力行為※1**に発展するケースが増えてきています。平成 28 年度に行われた文部科学省の調査では、全国の小学校における暴力行為発生件数は約 22,000 件※2にのぼるという報告も出されました。学校だけでなく児童館や学童保育など放課後の児童生徒の遊び場においても、暴力的な言動は日常茶飯事だということが多くないのではないのでしょうか。

人やモノに当たったり暴れたりする子どもたちには、自分自身の感情のコントロールがうまくできないケースが多く見受けられます。実際にこうした行動に出てしまったあとで、「自分はこんなことするはずじゃなかったのに…」と気づきつつも、どう引き下がれば良いか分からず、行動がさらに発展してしまうこともあります。

そんな時には、その子が自分自身で感情のコントロールができるよう、手助けすることを念頭に置いて接してみましょう。時には、ある程度モノに当たらせて様子を見守ることも大切です。ただし、その空間からはさみや工具といった刃物など、子ども自身や周囲の人を傷つけるような道具を排除しなければなりません。自分の感情をコントロールできないぶん、モノに当たることでストレスを発散して気持ちを落ち着かせます。そして、その子の気持ちが落ち着いた頃を見計らって、ゆっくり話をしていきましょう。

ただ、他の来館者が大勢いる空間で“見守る”ことをしてしまうと、その場面を見て嫌な気分になる人もいたり、その子やスタッフに対する周囲の目つきが変わったりしてきます。こうした周囲への配慮もふまえて、あえて静かな環境に移動させるといったサポートも必要です。

また、その行動が他者への暴力行為に発展したり、人の存在や価値を否定するような発言をしたりした時は、はっきりとした態度でその言動を止めることが大切です。

※1 文部科学省における「暴力行為」とは、「自校の児童生徒が、故意に有形力（目に見える物理的な力）を加える行為」をいい、被暴力行為の対象によって、「対教師暴力」、「生徒間暴力」、「対人暴力」、学校の施設・設備等の「器物破損」の4つの形態に分ける、と定義している。

※2 出典：平成 28 年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果（速報値）について（文部科学省、2017 年 10 月 26 日報道発表）

28 初対面の子どもから、「おまえ」「ババア」
などと呼ばれました。



いきなり乱暴な言葉で呼びかけられて、ムツとしたことがあります。どう反応していいかわからず、結果的に無視してしまったこともあります。こういうのって、どうかわせば良いのでしょうか。それとも、正面から受け止めるべきでしょうか。

(児童館職員)

いえもんのヒント



初めて会った子どもから正しい名前で呼ばれずに、「おまえ!」「ババア!」などの侮辱した呼称で呼ばれると、呼ばれた側としては腹立たしく、思わず強く怒鳴りたいところだと思います。しかし、こうした行動は、いわゆる「試し行動」と捉えて考えてみると良いかもしれません。本当は「話をしてみたい」「仲良くしたい」という気持ちがあるのに、わざと相手を侮辱するような言い方をして相手の出方を伺ってみたり、自分のことを構ってほしいというアピールの裏返しだったりします。言葉そのものを受け取るのではなく、「自分のことを無視しないで話しかけてくれた」と“変換”して考えてみましょう。

では、どのような反応が望ましいのでしょうか。これは、その時の子どもの心境や取り巻く状況によって変わってきますが、例えば、一般的な呼称で呼ばれた時と同じように「何?」と素直に反応するというパターンや、逆に「え?“おまえ”って私のことを言ってるの?」と相手に確認するように反応するパターンなどが考えられます。相手の言い方はどうであれ、「自分のことに興味や関心を持って話しかけてくれた」という事実を受け入れて、そこからお互いに自己紹介したり、何気ない会話につなげたりできると良いでしょう。

また、そのような呼び方をされた時に、周囲の人が不快に感じることもあります。「私は良いけど、他の人が嫌がる呼び方かもしれないから気をつけてね」といった「アイ(私)メッセージ(P.50参照)」を伝えて、対応しましょう。自分にとって好ましい名前で呼んでもらうためには、その子どもとの関係性が前提になってくると思います。強い口調で注意するのではなく、まずは目の前の子どもとの何気ない会話の時間を積み重ねて、関係性を築いていきましょう。

また、子どもには情緒的な“波”があります。大人も同じように、気分が良くて他人と社交的に過ごせる時もあれば、ストレスや疲れが溜まっていて他人に対して強い態度をとってしまう時もあるでしょう。関係性を築いていたとしても、こうした“波”によって相手の反応が変わることもあります。何かコツがあって短絡的にゴールへと導けるものではありませんので、心にゆとりを持って、中長期的なスパンでじっくりと関わってみましょう。

29 特定のスタッフをターゲットに、乱暴な言動をくり返す子どもがいます。



いつも特定のスタッフに突っかかってくる子どもがいて、困っています。できるだけ接触を避けようとするのですが、小さな施設なので限界があります。そのスタッフには、精神的な負担になっています。みんなでその負担を受け止めたいのですが…。

(プレーパークスタッフ)

いえもののヒント



こうした状況は、もはやターゲットにされているスタッフ一人だけでは対応できないように思われます。スタッフが子どもに対して「やめなさい」と制止する関わり方ももちろんありますが、他のスタッフがターゲットにされているスタッフに対してどのように関わるかが、焦点になってくると思います。今回は、後者を論点にして考えてみましょう。

事態を認知した時

ターゲットにされているスタッフは、その場を何とか収拾しようと必死になりますね。その言動をやめるように制止したり、「アイ（私）メッセージ（P.50参照）」を伝えてみたりしてみましょう。また、その際に少し大きな声でやり取りをしたり、大げさな反応を示したりして、他のスタッフへのSOSを発信すると良いかもしれません。

そのスタッフと子どもが対峙している場面を認知した他のスタッフは、どう対応できるかを考えてみましょう。例えば、「どうしたの？」と声をかける、わざと第三者のスタッフが入介入して子どもと話をしている間に、ターゲットにされていたスタッフを別の場所に移動させるなどが考えられます。対応例はさまざまですが、どんな状況であっても、ターゲットにされているスタッフを孤立させないことが大切です。

事態が収まったあと

その場面が過ぎたあとに、その場に関わったスタッフ全員でふりかえりをしましょう。事態の経緯もちろんですが、ここではそれぞれのスタッフの思いを分かち合うことをねらいとします。事態が起きている中では目の前で起きていることに対応するのが精一杯で、なかなか本音や気持ちを他者に伝えることはできません。事態が収まった直後は興奮状態も冷めやらず、感情的になってしまいます。時間を置いて冷静になってから、「私はどんな気持ちだったのか」「あの時、自分は何ができたのか」を考え、その思いを共有することで、次に同じような場面に出くわした時にどう対応していくかを考えていきます。

また、特定のスタッフを苦しめない環境をつくるだけでなく、「その子どもがスタッフを相手に、なぜ乱暴な言動になるのか」という観点で、その言動の背景を考え合ってみましょう。そのためには、日頃からスタッフ同士が子どもの情報を共有しておくことも大切です。その背景に迫った時に、乱暴な言動に発展する前の、日常的な関わり方が見えてくるはずです。スタッフ全員で、子どもとスタッフを守っていく体制を考えていけたら良いですね。

子どもの危険を判断する基準
「リスク」と「ハザード」

いえもん

いかに子どものケガを防ぐか——。子どもと関わる人にとっては、避けては通れない課題でしょう。この問いに対して、子どもの施設等では子どもがケガをしないよう対策を練っているところもあると思います。しかし、子どもは危険に少しずつ触れることで自分の身を守る方法を体感し、さまざまな困難や限界に挑戦してみようという気持ちを育んでいきます。「子どもの遊びにケガはつきもの」という考え方を前提に大きなケガや事故を防いでいくことも大切です。

プレーパーク（冒険遊び場）では、危険を「リスク」と「ハザード」の2種類に分けて考えています。「リスク」とは自ら挑戦する危険のことで、自分の限界に挑戦し、乗り越えていくという成長のプロセスでもあります。一方で、「ハザード」とは自分から挑戦できない隠れた危険のことを指します。例えば、ハンモックのロープが摩耗して切れる、腐食した柱が折れる、綱渡りのロープが首の高さに張られているなど、遊んでいる子どもには予測できない突発的な危険は「ハザード」を指します。子どもの目に見えないこうした「ハザード」を取り除きつつ、子どもの成長につながる「リスク」をいかに残せるようにするかがポイントです。

前述の問いに答えようと、危なっかしい遊びを片っ端から禁止することもあります。近所の公園に行けば、ありとあらゆる遊びが禁止されているのもそれが影響しています。しかし、大人から「危ないからやめなさい」と言われても、子どもがケガをした経験や危険な遊びをしたことがないと、「なぜ危ないのか」を理解することができません。一方で、子どもは遊びの過程で起きたケガを通して、「〇〇の方法では危ないから、次は△△の方法で挑戦してみよう」という気づきが生まれると、自分自身でケガをしないよう行動していきます。

安全管理の指針となるリスクマネジメントを細かく設定することは、子どもの行動の先回りに過ぎません。リスクマネジメントが悪いわけではないのですが、子どもの遊びから「ケガをする」ことを抜き取ってしまうのではなく、ある程度の危険要素を残して、子どもの成長につながる環境づくりを考えてみませんか。ケガを通して気づき学ぶ“遊びの力”を信じて、子どもの遊びをじっくりと見守っていきませんか。

以前、子どものキャンプで、キャンプ当日にアレルギーがあると参加者から聞いて驚いたことがあります。参加者から「牛乳は飲めない」と話があり、乳製品からカレーのルーまで、成分表を全部調べ、対応できるものとできないものとの確認しました。保護者の方との確認で牛乳アレルギーは、重度のものではなかったものの、もし、知らなかったらと思うとぞっとしました。皆さんもこのような経験はありませんか？

参加者の情報は、特に『命にかかわること』については、必ず事前に知っておく必要があると思います。参加が決定した際に、保護者の方と事前に連絡を取り合うことで、配慮できることもありますし、不測の事態を想定することも可能になると思います。そしてそれは、すべての子どもたちを受け入れることができる体制へとつながっていくと思います。

しかし、情報の中には、普段は「消極的なので」とか、「いつもじっとしていない」とか、他の情報もあつたりします。中には配慮しなければならない事柄もありますが、このようなキャンプやイベントでは、日常とは違ういろいろな場面で子どもたちの様子が変化する場合があります。そのため、参加者に対して、フラットな目線でいることが重要だと思います。

キャンプの最後、参加者がふりかえりをしていた時のこと、「僕は、すこしはじっとしてなさいと注意されることがよくあるけど、ここに来て〇〇さんから、自分からすぐ行動できるのがすごいって言われました。うれしかったので、またここに来たい。」というコメントを聞きました。本人の居場所の一つになったと感じた瞬間でした。

いつもは消極的な子どもも、体験を通して積極的にかかわるようになったりすると、情報の中にある言葉だけで子どもたちを見てはいけなないと思い知らされます。非日常体験によって、その子の普段とは違った良い部分が引き出されているのに、普段と同じようにその子を見てしまっは、せっかくのチャンスを見逃すことになってしまいます。その良い部分を発見し認めることが、私たちの大切な役目だと考えています。

子どもへの姿勢が一貫せず考え方の違いが出てしまいます。



事業のスタッフとして参加した時のことです。簡単に事前打合せはしたものの、実際に活動をする中で、子どもとの関わりかたのスタンスがスタッフ間で異なり、活動の最中に子どもたちを混乱させてしまいました。

(イベントスタッフ)

おーちゃんのヒント



子どもへの接し方はスタッフごとに違って当然ですし、ある程度はバラつきがあった方がむしろ自然だとは思いますが、子どもが戸惑うほど違いが大きい場合はやはり問題と言えるでしょう。

日頃からのコミュニケーション

基本的にはスタッフ間での日頃からのコミュニケーションが重要で、それぞれがどのような子ども観を持っているかを事前に把握し、あるべき対応について話し合う機会を設けることが一番効果的です。

対応の仕方

また対応の仕方については、基本的には団体や場の設定に準拠することを心がけましょう。どの現場でも、子どもたちにどのように成長していった欲しいのかについて等、大まかな方針が設定されているはずです。まずそれを確認し、自分自身の子どもへの関わり方がその中でどう位置づけられるのかを考えてみることで、現場での自分の立ち位置も明確になっていくでしょう。またスタッフ間の方針の違いも、現場の方針に照らし合わせながら検討することが可能になります。これは職員同士だけでなく、ボランティアの方との関わり方の違いを考える場合等にも有効です。

議論・意思表示の大切さ

ただ、こう言うと職員は団体の方針に黙って従うものと解釈されるかもしれませんが、そうではありません。もっとこうした方が良いのではないか、こうであれば良いのに、といった議論を起こすことは、団体の一層の改善にもつながる事です。そのために、どのように子どもと接するべきなのかをスタッフ同士で話し合い、意見を表明していく場があることは重要な事です。

31

ボランティアとして関わってくれる人が集まりません。



子ども祭りイベントを企画しましたが、人手がかかるため、地域のボランティアの助けが必要です。ボランティア募集のチラシをあちこちに配ったり、声をかけたり頑張っているのですが、なかなか集まらず困っています。

(イベントスタッフ)

おーちゃんのヒント



ボランティアが集まらない、あるいは集まっても長く続かないといった悩みは、結構多くの現場に共通のものではないかと思います。さまざまな企画・事業に不可欠なボランティアスタッフですが、ボランティアを集めようとする際に、ボランティアとして来てくれる人が何を求めているのかについて、考えてみてはどうでしょうか。

例えば大学生年代の場合、本人が面白いと思わなければ集まらず、集まっても連絡が滞りがちになる、なんてこともよくありますが、本人が面白いと感じてくれた場合はこちらが驚くほど積極的に関わってくれたりもします。「子どものために」といったように活動の意義を強調するだけでなく、ボランティアを集める場合には一度ボランティア目線に立って、何が求められているのか、どういった点で面白いと思ってきているのかを考えてみると良いのではないのでしょうか。特に初めて参加する際の印象は大事で、そこで面白いと思ってもらえればその後も繰り返し参加してもらえる可能性が高くなります。

どういった点がボランティアにとって面白いと思えるのかは事例ごとに異なりますが、一般的にボランティアに面白いと思ってもらえるようにするためには、ボランティアが子どもと馴染むことができるようにサポートすることや、ボランティアの裁量の大きさ等が関わってきます。言われた通りに機械的に動くだけではつまらないのは誰でも同じなので、ボランティアの人たちがのびのびと活動できるよう環境を整えるようにしてみましょう。

コラム

「面白い」のとらえ方

ももっち

「面白い」とは、単にその場で生まれる楽しみや面白さだけをいうものではありません。例えば、子どもとの関係の中で生まれる成長や感動などを実感できること、自分の存在が相手から認められている・必要とされているということを実感できることなどがあります。

また子どもとの活動を通して新しい自分を発見できることや、自分で考えたことが形になることの満足感などもあるでしょう。

面白いと感じる部分は人それぞれ違うと思います。そのような、人との関わりの中から生まれるさまざまな感情を体験できるところが、ボランティアの活動の中にあるのではないのでしょうか。

32 子どもに対しても物事を伝えることができません。



活動に集中できず困っている子どもに話をするのですが、どうしても長々と話してしまい、こちらの思いがなかなか伝わりません。子どもと話をする時には、いつも構えてしまいます。どうすれば良いのでしょうか。

(ボランティアスタッフ)

おーちゃんのヒント



子どもとの話し方は場面や立場によって変わるものであり、こういった立場から何を伝えようとしているのかが重要になります。ただ、一般論として子ども目線に立って伝えようとすることの重要性は指摘できると思います。

ここで「子ども目線」というのは、子どものノリやテンションに合わせて話をする、ということではありません。子どもに限らず人間誰しも、人から言われた内容を自分なりに解釈し、理解しようとしています。だから、子どもに何かを伝えようとする際には、姿勢や語調等にも気を配り、子どもたちがこういった受け止め方をしているのかを確認しながら話をする必要がありますでしょう。

具体的な話になると個人差も大きいのですが、基本的にはこちらが真剣に話をしていることが子どもたちに伝わるよう、相手の正面から目を見て話し、また目線を同じ高さにして話す等が効果的です。時には注意・叱責をしなければならないこともありますが、その場合でも一方的に言い募るのではなく、一つの人格を持つ存在としての子どもと向き合っていることを意識してください。また、話の要点をしっかりまとめておくことも重要ですが、何よりも真剣に向き合おうとしている姿勢がしっかりと伝われば、子どももこちらに向き合ってくれるはずです。

コラム

ピンチはチャンス

ももっち

子どもが問題行動を起こすと、大人としては困ってしまいます。しかし、実は、子ども自身も困っているのです。問題行動は子どもの思いを知るためのチャンスと捉え、子どもが発信したことに注目し、その時の子どもの状況、前後に起こった出来事（前日友だちとケンカしてむしゃくしゃしていた、朝出かける時にも思いを寄せて、子どもの言い分に耳を傾けてみてください。

子どもの様子をよく観察しその気持ちを（「イライラしちゃったんだね」「苦しかったんだね」のように）一度大人が受け取ることで、子どもも自分の存在を認めてもらえたと感じることができます。そのうえで問題行動にふれて「では、どうすれば良いのだろう？」と、一緒に考えるようにすることで、子どもが自ら気づき、行動が落ち着いてくることがあるようです。一方的に叱らず、子どもの人格を尊重し、その行動に隠されている子どもの思いに注目してみることもピンチをチャンスに変えるヒントです。

33 他機関・地域と連携・協力する必要はありますか。



事業を担当しているのですが、地域のある団体から連携しようと声をかけられました。ちょっと面倒です。自分たちの団体だけでもできるのですが、地域との連携って必要なことなのでしょうか？

(イベント企画スタッフ)

おーちゃんのヒント



一つの団体で実施しているプログラムを成功させることが目的なのであれば、他の機関と協働※する必要はないのかもしれません。しかし、そうしたプログラムを通して子どもたちの成長・発達に寄与することを意図して活動してくださっているのであれば、やはりさまざまなレベルでの協働は不可欠であると思います。その意味で、地域との関係構築は子どもの成長・発達観に関わる課題であり、どちらかという現場で直接子どもと触れ合うスタッフよりも、マネージャーの立場の方にとって重要な項目と言えるかもしれません。

子どもは一つの間だけで成長していくのではなく、地域のさまざまなところに顔を出し、多くの人と関わりながら大きくなっていきます。その際、子どもはその時いる場所に依りてさまざまな顔を見せますが、例えばキャンプ等の活動の際に見る子どもの様子が、学校での様子とまるで違うことなどよくあります。子どもたちの成長・発達を見通すためには、こうしたさまざまな場での様子を踏まえながらどのように関わっていくかが問われることになるのです。

また、子どもと関わっていく中で直面するさまざまなトラブルについても、その多くが他機関・地域との連携による対応を必要としています。子どもに関わるさまざまな人がネットワークを構築し、各種情報の共有や意見交換を重ねながら、子どもを見守る体制を整えていくことが求められています。

※協働：立場は違っても同じ目的を持つものが対等に意見交換して行動を共にすること。

コラム

学校などとの連携

ももっち

県内の公立小・中学校では、学校支援ボランティア制度が導入されています。また、公立小・中・高校の中には「学校支援地域コーディネーター」が活躍している学校もあります。地域の方々による学校支援地域コーディネーターや、窓口となる担当教員が配置されている場合には、その担当者に具体的に企画や事業、交流内容などを理解してもらい、無理なくできることから連携を始められると糸口が見えてきます。

まずは日常の活動や、行事など、参加できる場を探して、その場に赴き情報交換を行い、徐々に相手が必要としていることをリサーチしてみても良いでしょう。多忙な相手には活動内容をわかりやすくまとめて伝えどんな形での協力が可能かをこちらから提案してみるのも一つの方法です。

(参考) 神奈川県教育委員会ホームページ「学校支援ボランティア」

34 地域へのアプローチの仕方がわかりません。



地域と連携していくことには、意味があると思うのですが、具体的にどういう連携のしかたがありますか？また、やってみようと思ったけれど、どうすれば良いのでしょうか？

(イベント企画スタッフ)

おーちゃんのヒント



地域にこういった団体があるか、また子どもたちの置かれている状況について認識されているかは、地域ごとの差が非常に大きいと思います。ただ、自治会や商店組合といった、地域の人たちの集まりがあるようなら、まずは一度話をする機会を設けてみてはいかがでしょうか。地域住民の間で子どもたちがどのように認識されているのかを把握するだけでも、その後の関わり方に大きなプラスとなるはずです。

その際、あまり具体的に話し合いのテーマを設定しなくても構いません。むしろ先方の会議の場に入り込んでしまうくらいでも大丈夫で、大事なことは腹を割って語ってもらえる環境を作ることです。また、その際には地域にとって子どもと関わるということがどういう意味を持つことなのか、相手がどのように考えているのかを理解しようとしてみてください。よくある話として、「子どものために」と地域に協力をしてもらっていると、地域側が疲弊してしまい長続きしないことがあります。また子どもたちが地域振興などの地域側の目的のために位置づけられてしまうことも多いです。

子どものために地域を使うのではなく、また地域の振興などのために子どもを位置づけるのではなく、双方の意図を調整しながら長く続く関係性を構築していく、コーディネーターとしての役割が必要になってきています。いきなりそれぞれの意見の調整と言われても難しいとは思いますが、まずは地域側がこういった認識を持っているのか、じっくり聞いてみるところから始めることをお勧めします。

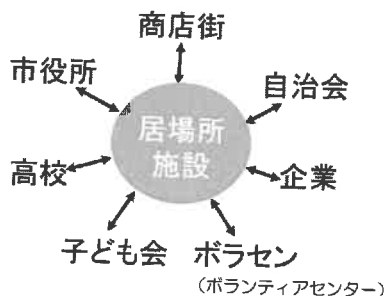
コラム

ステーキホルダーマップ

シンブソン

地域の団体との関係を考える際に、まずは関係のありそうな団体をどんどん挙げてみて、それを図にしてみるという方法があります。こうした図をステーキホルダーマップと呼びます。ステーキホルダーとは「利害関係者」というような意味で、どんな団体とどんな関係を持ったら良いかを考える手がかりとなります。

できればどちらかが一方的に負担をかけるのではなく、双方にとって価値のある協働ができれば、その関係を長く続けることができるでしょう。



35 会議等の話し合いの場で意見が出てきません。



話し合いの場で、シーンとした雰囲気になってしまっていて、なかなか会話が弾んでいないことがあります。進行役としても、また、参加者の立場としても、活発な会議にするためにはどうすれば良いのでしょうか。

(イベント企画スタッフ)

おーちゃんのヒント



話し合いの場で誰も発言せず、静かになってしまうことがあります。理由はいくつか考えられますが、多くの場合何となく口火を切るのがためられる雰囲気になっていたり、そもそも何を言えば良いのかわからなくなっていたりすることが多いように思われます。

そういった場合、重要なのは論点を絞って明確にすることです。「～についてどう思いますか」といった漠然とした聞き方ではなく、自分なりの整理で構わないので論点を出し、具体的なイメージがしやすい形で話題にすると、次の人も意見を言いやすくなります。また特定の話題について意見を聞きたい人が居る場合は、名指しで意見を求めることも効果的です。場合によっては参加者全員に一言ずつ意見をもらうようにしても良いでしょう。司会の役割に就いている場合は特にそうですが、そうでなかったとしても一参加者として議論が活性化するように働きかけてみてください。

少し違う場合として、参加者同士の意見の対立が表面化しており、お互いに牽制しあうことで沈黙が生じている場合もあります。こういった場合は、個々の話題で議論をしても解決しない場合が多いため、まず相違点の根幹がどこにあるのかについて意見をもらい、折り合えることができるポイントを探す方が建設的だったりします。それぞれの参加者が、何を背負って話し合いに参加しているのか、どこからは譲ることができないのかを、見極めることが重要です。

【会議で使える手法】

(参考) 「平成 15 年度会議・話し合いガイド」

(P. 84 参照)

①ブレインストーミング	何人かが特定のテーマについてアイディアを出し合う「集団的発想法」です。奔放な発想を歓迎し、どんな意見も批判しないことが大切です。アイディアの数が勝負で、出てきたアイディアを結合、改善、発展させます。参加者の創造性が開発されたり、チームワークが強化されたりという効果があります。
②バズセッション	グループごとに①を実施し、その結果を全体会議に持ち寄る方法です。6人程度が標準ですが、人数の都合により調節します。グループ討論の時間も6分が標準ですが、20分30分必要な場合も多いです。大人数でも自由に活発な討議ができ、グループの中では密度の高い討議ができます。また、グループの討議と全体会議を効果的に組み合わせることにより全体の整合性や統一が図れるという効果もあります。
③KJ法	メモまたは付せんを利用したアイディア出しです。カードを使うので参加者全員が気負うことなく参加でき、まとめも視覚的でわかりやすい方法です。さまざまなアイディアや意見、情報を1枚ずつ小さなカードや付せんに書き込みます。次にそれらのカードの中から類似するものをグループ化し図解してアイディアをまとめます。

36 話し合いの際の司会進行のやり方が わかりません。



司会をしていると、いつも時間切れになりがちで、結論を急ぎ誘導するような形になってしまいあせります。また、活発な意見を引き出しながら進めたいと思いますが、話が弾むと脱線してしまったりして、会議の進行は苦手です。

(イベント企画スタッフ)

おーちゃんのヒント



話し合いにもさまざまなものがあり、結論をどのように持っていくかによって司会のやり方も少しずつ変わりますが、基本的には参加者の意見を引き出し、参加者間の合意形成を目指すことが主な役割となるでしょう。

進行を担当する際に重要なことの一つは、いかに参加者が意見を言いやすい環境を整えるかですが、これについては前項(P.74)で、ある程度言及しているのでここでは割愛します。進行をする際にもう一つ重要になるのが、既定の時間内に議論に一定の結論を出すための、全体への目配りです。例えば終了時間から逆算して進行を行うことや、話し合いのテーマから逸れた話題となった時に元の議題に引き戻すことで、時間内に一定の成果を出せるよう話し合いの内容をコントロールすることが求められます。話し合いのルールを確認し、議論の内容を整理しやすいようにすることも有効でしょう。またそのためには、議論の様子を見ながらどういった結論になりそうかをイメージし、残り時間を使ってそこに至るまでの道筋ができるよう議論を先導していくことが必要になります。

ただし、これもよくあることではありますが、司会がイメージした結論に議論を誘導したり、イメージにそぐわない発言を安易に切り捨てたりするようなことはあってはなりません。進行のイメージにこだわり過ぎず、一人ひとりの発言者の意図がどこにあるのかをしっかりと考えながら、適宜軌道修正をしていってください。

コラム

話し合いでこんなこと、あんなこと

ももち

会議の時に何が言いたいかわからない意見を言う人がいます。そんな時は、「それは〇〇〇ということですか？」と言いなおして確認しながら進めると参加者全体の理解も進み、会議の効率アップにつながります。

また、議題を絞っていく時などには、「ざっくりまとめて言うと、〇〇…こういうことですよね!？」と言葉にして問い直します。会議の場で、司会者がこのように進められるとベストですが、なかなか難しいものです。うまくいかないこともあるので、参加者が応援の発言をして助け合い、全員で話しやすい会議を作れると良いと思います。その和やかな雰囲気が会議においてお互いの信頼感や安心感を生み出し、ひいてはそれが、良いアイディア創りや活発な会議につながっていきます。もしできれば、普段からコミュニケーションが取れている人を、話し合いのメンバーに仕込んでおく都合が良いです。気心が知れているので、話が停滞した時や、ここで場を活性化させる意見を言って欲しいという時に「〇〇さんどうですか?」と振ると話し合いが進みます。

37 話し合いの場で自分の意見をうまく伝える
ことができません。



会議になると、話したいことは頭に浮かんでくるのですが、それらがなかなかまとまらず、言いたいことの半分も伝えられないということがよくあります。うまく伝えるコツはありますか？

(イベントボランティアスタッフ)

おーちゃんのヒント



人前で話す時にうまくまとめて話すことができず、長々と話した上に結局伝わらなかった、という経験がある方も多いのではないのでしょうか。

話す内容を考える際にまず意識をしなければならないのは、話し合いの主題が何かということです。思いついたことをそのまま話していると、話し合いの主題から逸れてしまい、伝わらないだけでなく話し合いの場を混乱させてしまうこともあり得ます。そうならないために、その場が何について話す場であるかを認識し、その主題に沿った意見を出すよう心掛ける必要があります。また、その主題に対して自分は何を言いたいのか、それまでの議論にどういった形で関与したいのか、例えば賛成なのか反対なのかといった簡単なまとめだけでも先にしておく、自分自身の話し合いの中の立ち位置がわかりやすくなるはずです。

とはいえ、自分の意見をまとめるのはなかなか大変で、例えば自身の関わっている現場のエピソードが浮かび、それまでの話と関連するはずだけどうまくまとめられない、ということもあるかと思います。そういった場合には、それを素直に伝えてしまいましょう。無理にまとめようとするよりも、関連すると思われる事例として紹介するにとどめた方が、他の参加者のイメージを膨らませることにもつながりますし、うまく取りまとめてくれる人がいるかもしれません。他の人と協力しながら、言葉にならなかった自分の思いを整理していても大丈夫ですし、そうしたやり取りが自分自身の話をまとめる力を向上させることにつながります。

【会議の進め方に関する参考文献】

- 『生涯学習支援のための参加型学習のすすめ方～「参加」から「参画」へ～』
廣瀬隆人・澤田実・林義樹・小野三津子著 ぎょうせい
- 『発想法－創造的開発のために－』川喜田二郎著 中公新書
- 『続・発想法－KJ法の展開と応用－』川喜田二郎著 中公新書
- 『参加型ワークショップ入門』ロバート・チェンバース著 明石書店
- 『ファシリテーション革命』中野民夫著 岩波アクティブ新書
- 『会議の技法－チームワークがひろく発想の新次元』吉田新一郎著 中公新書
- 『ミーティング・ファシリテーション入門』青木将幸著 ハンズオン！埼玉出版部
- 『ファシリテーション・グラフィック－議論を「見える化」する技法』
堀公俊・加藤彰著 日本経済新聞出版社
- 『Graphic Recorder－議論を可視化するグラフィックレコーディングの教科書』
清水淳子著 ビー・エヌ・エヌ新社
- 『ワールド・カフェ－カフェ的会話が未来を創る～』アニータ ブラウン他著 ヒューマンバリュー
- 『ワールド・カフェをやろう 新版 会話がつながり、世界がつながる』
香取一昭・大川恒著 日本経済新聞出版社

相手に主体性を持ってもらうためにはどう関われば良いのでしょうか。



プログラムへの関わり方として、積極的に関わることで活動に充実感がもてるのではないかと思います。最近、スタッフからの指示待ち状態の子どもやボランティアさんが多いように感じます。主体的に関わってもらうためにはどうすれば良いのでしょうか。

(施設事業スタッフ)

おーちゃんのヒント



子どもはもちろんですが、ボランティアや地域の方などの関わってくれる大人にも主体的に取り組んでもらうことが、活動の活性化や継続性の確保につながります。

主体的に動いてもらえるよう働きかける際に重要になるのは、相手の意見の実現可能性に対する意識です。単純に言ってしまうと、意見や要望を出した時に、それが実現する可能性があると思ってもらえていれば、主体的に意見を出してもらうことができるようになります。逆にプログラムがしっかり決まりすぎていたり、ボランティアさんに、言われたことをこなすことを求めすぎたりしていると、主体的に関わってもらうことは難しくなるでしょう。

実際には安全面の問題などからよせられた意見を実現させるのは難しい場合も多いかと思いますが、その際にも相手が何を求めているのかをよく聞き取り、やりたいことが実現可能な形式はないのかを一緒に考えるなど、しっかり向き合っている姿勢を示すことができれば、意見を出すことに躊躇することはなくなるはずです。

基本的には自由で主体的な取り組みは、相互の信頼関係の上に成り立つものです。年齢を問わず相手が一人の人間であることを認め、真摯に向き合う姿勢を示すことこそ、最も重要なことではないでしょうか。

コラム

大人にできること

ももっち

昔は子どもたちが中心的な役割を担う地域の活動（伝統行事・伝統芸能）が、広く普通に行われていました。子どもたちは、それらの体験を通して人との関わりや主体的に行動することなどを学び、成長していきました。しかし、子どもの教育が学校教育に任されるようになり、地域の教育力が衰弱するとともに学校教育にも限界があることが明らかになってきました。そこであらためて学校と地域の協力が必要になってきたのです。今必要とされているのは、日常生活のさまざまな体験の中で、失敗を重ねながら学んでいくという機会を持てるように、地域の暮らしなどに子どもたちが中心となって活動する機会を用意することです。

私たち大人に求められているのはそのための条件をつくり、子どもたちの活動を支援する役割です。そしてその中で、子どもたちが主体的に動けるようになるためには、子どもが自分の力を試せる機会をつくることと、大人はお節介を焼くのではなく、ゆったりと構えて待つことが大切です。何でも思ったようにやって良いと言っておきながら、いざとなるとあれはダメ、これはダメと言っていは大人への不信感を高めるだけです。活動が壁に突き当たった時には子どもたちと一緒に知恵を出し合い、その壁を乗り越える工夫を続ければ良いのです。

ふりかえりは、「活動の良し悪し」ではありません。

プーさん、おーちゃん

そもそも「ふりかえり」は、「活動の良し悪し」を判断するものではありません。

ふりかえりとは、活動した本人がその活動から得られた気づきや学びを確認するためのものです。

活動した後にふりかえり、そこから得られた気づき・学びを日常生活や社会生活（地域、学校、仕事等）にどう生かしていくのが大切なことです。

活動とは、「キャンプ」や「子ども祭り」、「カヌー・カヤック」、「ボランティア活動」、「地域活動のサポート」、「イベント企画・運営」等さまざまです。

具体的な、「ふりかえり」は、以下のような方法があります。

- ① 少人数グループ（2～6人）で、自分の変化や感想、気づいた点を発表し、それを全体で発表する。他のグループで出てきたことを共有できる。
- ② 全体で自分の変化や感想、気づいた点を一人ひとりが全体の前で発表する。全体の人数が少ない方が、ハードルが低く発表しやすくなり、短時間で済む。
- ③ ふりかえる項目を設定したふりかえり用紙に、一人ひとりが記入し、貼り出し共有する。（無記名、記名はその集団の状況による）。ふりかえる項目は、例えばグループで協力する活動であれば「協力できたか」「グループに貢献できたか」「活動の前後の自分の変化は？」等がある。
- ④ ①②を行う前に③のふりかえり用紙に記入する方法もある。
- ⑤ 他の参加者に、「よかった点」「気づいた点」「改善点」等を批判でなく前向きな表現でメモ書きし渡す。その際に記名した方がその後につながる。
- ⑥ 自分の気持ちを自分の言葉で表現するのが難しい時がある。そこでプロジェクトアドベンチャーで利用されている「FULL VALUE CARDS（フル バリュウ カード）」等を利用し、何かを媒体にして自分の気持ちを表すこともひとつの方法である。

「ふりかえり」は活動の結果ではなくその過程で起きたことを文字通りふりかえることで、人が成長していくためにとても重要なことです。

※ 「FULL VALUE CARDS（フル バリュウ カード）」は、写真（60枚）や文字（100枚）の多様なカードで構成され、その中からカードを選び、それを媒体として今の自分の気持ちを表してみようというものである。

青少年支援・指導者に求められる参加者等に対する配慮とは

プーさん

子どもも大人も一人ひとり違った個性・特性を持っています。

障がいがある方、LGBTの方、外国籍の方等すべての人々が同じ社会で生活する権利を有します。

神奈川県では県立津久井やまゆり園における痛ましい事件をきっかけに、平成28年10月14日「ともに生きる社会かながわ憲章」が定められました。憲章の中で障がい者への偏見や差別を排除し、すべての人のいのちを大切にすることで、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会の実現を目指すことを謳っています。

青少年支援・指導者は地域で活動するにあたり、子どもや大人の前に立ち、話をしたり、活動の中で言葉をかけたりすることがあります。その際に上記を踏まえ配慮しなければならないことがあります。そこで以下について十分に理解しておくべきでしょう。

- ・障がい者：身体障がい、知的障がい、精神障がい、発達障がいを含む。
- ・LGBT
 - L：女性同性愛者（レズビアン、Lesbian）
 - G：男性同性愛者（ゲイ、Gay）
 - B：両性愛者（バイセクシュアル、Bisexual）
 - T：トランスジェンダー（Transgender）

- ・外国籍や特定の民族に対する差別

外国籍：日本国内において日本以外の国籍のことを指す。

ヘイトスピーチ：特定の民族や国籍の人々を排斥する差別的言動がいわゆるヘイトスピーチである。こうした言動は、人々に不安感や嫌悪感を与えるだけでなく、人としての尊厳を傷つけたり、差別意識を生じさせたりすることになりかねない。

- ・ハラスメント（Harassment）

いろいろな場面での『嫌がらせ、いじめ』のことを意味し、その種類はさまざまだが、他者に対する発言・行動等が本人の意図とは関係なく、相手を不快にさせたり、尊厳を傷つけたり、不利益を与えたり、脅威を与えたりすることを指す。

すべての子どもや大人に対して差別的な言動、ハラスメントな言動・行動をすることは許されないことです。障がいや性別等に関係なく、すべての子どもや大人が、心穏やかに活動に参加できる環境づくりのために、スタッフ間で共通認識を持ち、行動・発言・言葉かけに配慮すること、また一人ではなく複数のスタッフで対応することが大切です。

もっと知りたい方へ

参 考 文 献

この冊子に書かれている内容についてもっと深く知りたいとか、もう少し違った方法を探してみたいという方のために、参考になりそうな文献をいくつか挙げておきます。キャンプの参考文献はたくさんありますが、特に安全管理について参考になりそうなものを取りあげています。なかには書店では手に入りにくいものもあります。図書館等で探してみてください。県立青少年センターの青少年資料室にも、いくつかの参考文献が置いてあります。

『対立がちからに』プロジェクトアドベンチャージャパン訳 C.S.L.学習評価研究所

『みんなのPA系ゲーム243』諸澄敏之編著 杏林書院

『アイスブレイクベスト50』青木将幸著 ほんの森出版

『遊ぶ・暮らす 子どもの放課後に関わる人のQ&A50

ー子どもの力になるプレイワーク実践』プレイワーク研究会編 学文社

『居場所のちから』西野博之著 教育史料出版会

『冒険遊び場づくり 危機管理の初歩』（冒険遊び場ブックレット【技術編01】）

NPO法人日本冒険遊び場づくり協会著

『自然体験活動指導者 安全管理ハンドブック』NPO法人自然体験活動推進協議会

『自然体験活動のリスクマネジメント』NPO法人自然体験活動推進協議会

『すぐに役立つ野外活動ハンドブック』石田泰照編著 黎明書房

『冒険心はじけるキャンプ グループワークを生かした新しい野外活動』

神谷明宏著 あすなろ書房

『キャンプ&野外生活ワンダーランド 準備からテクニックまでだいじなことがよくわかる』

神谷明宏・柴田俊明編著 いかだ社

『改訂キャンプテキスト』日本野外教育研究会編 杏林書院

『野外教育における安全管理と安全学習』（野外教育入門シリーズ第2巻）

星野敏男・金子和正監修 自然体験活動研究会編 杏林書院

『自然体験活動中の安全対策』

野外安全対策研究会／国立オリンピック記念青少年総合センター 政府刊行物

※会議の進め方に関する参考文献は、78 ページにまとめてあります。

これまでの発行物紹介

<配布中> (平成 30 年 3 月現在)

- 平成 28 年度 あそびなま (冊子)
平成 27 年度 笑顔があふれるアイスプレイキング (DVD)
平成 26 年度 これで決まり☆使えるイラスト大全集 (CD-ROM)

※在庫のあるものに限り、青少年の育成に関わる方にお配りしています。
詳しくは、県立青少年センター指導者育成課までお問い合わせください。

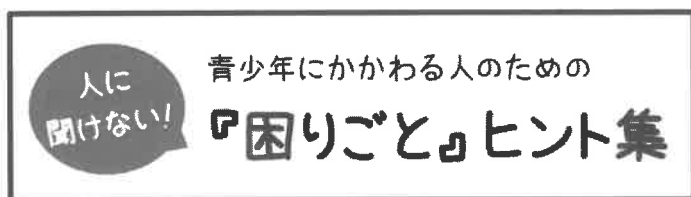
<web でデータ公開中>

- 平成 25 年度 遊びのタネ・ネタ帳
- 遊ぶ・つなぐ・工夫する・遊びサポーターの巻 -
平成 24 年度 つくって、あるいて、新発見！
- 地域を知る・楽しむ 歩くプログラムの作り方 -
平成 23 年度 楽しくすすめるグループワーク
- 個と集団の気づきをうながす -
平成 22 年度 どこでもアウトドア
初心者におすすめ！自然体験活動の手引き
平成 21 年度 JL (ジュニア・リーダー) × I (私＝育成者)
意外に役立つ JL 育成ハンドブック
平成 18 年度 はじめのいっば
活動で困った時に役立つ、子どもサポーターハンドブック
平成 17 年度 地域活性化工場産「元気の缶詰」
子ども・若者が主体的に参画するための活動プログラム集
平成 16 年度 子どもと大人の参画関係
子ども・若者が主体的に参画するための活動事例集
平成 15 年度 会議・話し合いガイド

※冊子の配布は終了しましたが、収録データの一部を青少年センターのホームページからダウンロードしてご利用いただけます。

指導者育成課

検 索



この本の制作に関わった人たち

○執筆 神奈川県青少年指導者養成協議会専門部会 委員

石川 聡之（小田原市青少年推進員）

石原 遼（川崎市子ども夢パーク スタッフ）

大山 宏（東京都板橋区立大原生涯学習センター 社会教育指導員）

高橋 博（神奈川県立愛川ふれあいの村 副所長兼事業主任）

○イラストデザイン

古森 真理子（川崎市子ども夢パーク スタッフ）

○編集 神奈川県青少年指導者養成協議会専門部会 事務局

川手 隆生（神奈川県立青少年センター指導者育成課）

田倉 弘明（同）

菊地 利津子（同）

清水 功（同）

吉田 忠利（同）

発行 平成 30 年 3 月

神奈川県青少年指導者養成協議会

編集 県立青少年センター 指導者育成課

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘 9-1

TEL◆ 045-263-4466

FAX◆ 045-242-8190

指導者育成課

検 索

